

2023 年度

東北学院大学外部評価報告書

2024 年 3 月

東北学院大学外部評価委員会

目 次

第5期東北学院大学外部評価（2022～2024年度） 概要	1
1. 第4期外部評価委員会からの引き継ぎ事項.....	1
2. 第5期外部評価の概要.....	1
2023年度東北学院大学外部評価委員会の活動及び報告書について.....	2
1. 東北学院大学外部評価委員会.....	2
2. 2023年度外部評価の活動及び評価項目	3
3. 2023年度外部評価活動スケジュールの概要	4
4. 本報告書の構成.....	5
I. 2023年度東北学院大学外部評価に係る書面調査	6
II. 学生インタビュー	7
1. インタビュー実施概要.....	7
2. インタビュー項目.....	8
3. インタビュー結果.....	10
III. 2023年度東北学院大学外部評価委員会 委員による所見.....	11
1. 学修成果の検証及び可視化.....	11
2. e-ポートフォリオの活用.....	17
3. 学修支援・研究指導に関する取組状況.....	19
IV. 2023年度東北学院大学外部評価委員会 総評	22
【別紙】	25
2023年度東北学院大学外部評価委員会 書面調査シート	25
【参考資料】	31
① 2023年度東北学院大学外部評価委員会 名簿	31
② 東北学院大学外部評価委員会規程.....	32
③ 2023年度第1回東北学院大学外部評価委員会 議事録	34
④ 2023年度第2回東北学院大学外部評価委員会 議事録	38
⑤ 2023年度外部評価委員会学生インタビュー報告書	44
⑥ 学生インタビュー事前アンケート結果概要（自由記述を除く）	49
⑦ 2023年度第3回東北学院大学外部評価委員会 議事録	53

第5期東北学院大学外部評価（2022～2024年度） 概要

1. 第4期外部評価委員会からの引き継ぎ事項

2019～2021年度の第4期外部評価では、中教審で「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）」（2018年11月26日）が提示され、大学分科会で「教学マネジメント指針」（2020年1月22日）が策定されたこと等を踏まえ、学修者本位の大学教育の実現や学修成果の可視化を進める上で必要となる教学マネジメントの運用体制を評価対象として実施した（各年度に掲げた具体的テーマは下記の通り）。2020年度及び2021年度は新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け、コロナ禍対応下における授業運営・方法の点検・評価に軸足を置くこととなったが、全学レベルでの教学マネジメント体制や各学位プログラムにおける教学上の3つの方針の設定とその運用について評価を行うことができた。

2019年度：2017年大学評価結果の長所として特記すべき事項の伸長

2020年度：新型コロナウイルス感染症感染拡大による遠隔授業の実施状況

2021年度：学士課程における教学上の3つの方針の点検・評価状況

第4期委員会からの引き継ぎ事項としては、内部質保証システムの運用状況と併せ、全学及び学部・研究科における教学マネジメントの機能的有効性の検証が求められている。

2. 第5期外部評価の概要

第5期外部評価委員会では、教学マネジメント体制の個別具体的な運用状況を評価対象とすることが、2022年度第1回外部評価委員会で承認された。

なお、外部評価委員会は独立した立場から、①自己点検・評価との差別化を図ること、②教学に関する懇話会や西南学院大学との相互評価のテーマとの住み分けもしくは共存を図ることを基本原則とし、新たな外部評価委員、継続される外部評価委員それぞれの意見を尊重しつつ、計画・実行していく予定である。

2023 年度東北学院大学外部評価委員会の活動及び報告書について

1. 東北学院大学外部評価委員会

東北学院大学外部評価委員会（以下、「本委員会」という。）は、東北学院大学外部評価委員会規程」に基づき、東北学院大学に設置された委員会である。本委員会は、学外の第三者による外部評価を実施する委員会であり、評価を通じて、同大学の教育・研究水準の向上及び組織の活性化に資する提言を行うことを目的としている。

第5期となる本委員会は、杉本和弘東北大学高度教養教育・学生支援機構教授を委員長として、2022年度に発足した（任期：2022～2024年度）。構成員は、下記のとおりである。

No.	所属	氏名	根拠規程
1 委員長	東北大学高度教養教育・学生支援 機構教育評価分析センター長	杉本 和弘	第5条第1項第1号 (大学等の教育機関の教員)
2 副委員長	東北工業大学地域連携センター 事務長	阿部 智	第5条第1項第3号 (本学の所在する地域の関係者)
3	尚絅学院大学 学長	鈴木 道子	第5条第1項第1号 (大学等の教育機関の教員)
4	株式会社ミヤギテレビサービス 非常勤相談役	高野 昌明	第5条第1項第5号 (本学の学部を卒業した者又は大 学院を修了した者)
5	宮城県美術館 館長	伊東 昭代	第5条第1項第3号 (本学の所在する地域の関係者)
6	石巻市立桜坂高等学校 校長	熊谷 聡也	第5条第1項第3号 (本学の所在する地域の関係者)
7	株式会社 一条工務店宮城 代表取締役社長	峯岸 宏典	第5条第1項第2号 (経済界の関係者)

2. 2023 年度外部評価の活動及び評価項目

(1) 2023 年度の評価の概要

本年度は、教学マネジメント体制の個別具体的な運用状況として、内部質保証及び学修成果検証への学生参画に焦点を当て、書面及び学生インタビュー調査を通して評価する。

(ア) 書面調査

①現状と根拠資料の提出

- 大学において行われている学修成果の検証及び可視化、e-ポートフォリオの活用、それらに基づく学修支援・研究指導に関する取組状況を書面にて提出

②委員より大学及び学生への質問を提出

- 質問シート及び学生へのインタビュー項目を事務局へ提出

(イ) 学生インタビュー調査（第2回外部評価委員会）

- 外部評価委員会により、学修成果、e-ポートフォリオの活用、授業評価、学修支援、研究指導等に関する学生インタビューを実施する（事務局と高等教育開発室のみ学生インタビューに陪席）。
- 対象学生は各学科1名程度（募集停止学科も含む。学年は均等になるように割り当てる）

(2) 評価項目・観点

① 学修成果の検証及び可視化

調査項目	観点
授業改善のための学生アンケート	実施の単位、時期・回数、集計・分析、結果の活用状況
成績評価	アセスメント・ポリシー/プランの活用状況
	成績評価基準の活用状況
	GPA の活用状況
卒業時点の到達状況	学位取得数
	国家試験合格数
	資格取得数
	受賞・表彰数
	進学率・就職率
出口質保証の仕組み	ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位授与の方針）を総合的・客観的に評価する科目（卒業論文/研究、ゼミ等）の設定と評価
学生調査（直接評価）	アセスメント・テストの実施と結果の活用状況

学生調査（間接評価）	入学生意識調査の実施・活用状況
	卒業時意識調査の実施・活用状況
	卒業生アンケートの実施・活用状況
	卒業生進路・就職先への学修成果調査の実施・活用状況
教学に関する懇話会	開催頻度、聴き取り内容、結果の活用状況
学生協議会	開催頻度、聴き取り内容、結果の活用状況

② eポートフォリオの活用

調査項目	観点
システムの概要	入力項目、インターフェイス
利用率	学生による入力率・アクセス頻度

③ 学修支援・研究指導に関する取組

調査項目	観点
学修支援体制	グループ主任制度
	アカデミック・アドバイジング、学修支援のための仕組み（学習相談、初年次教育、リメディアル教育、ピアサポート）
eポートフォリオ活用度合い	学習支援、履修指導、研究指導、学生との面談における活用状況

3. 2023年度外部評価活動スケジュールの概要

時期	活動内容
7月13日	●2023年度第1回外部評価委員会 内容：2023年度の評価対象・内容・方法およびスケジュールの検討・決定
9月上旬	○評価項目・観点に基づき作成した「書面調査シート」をもとに、大学において行われている学修成果の検証及び可視化の状況、eポートフォリオの活用状況、学修支援・研究指導の状況を外部評価委員に提出
9月下旬	○外部評価委員から、「書面調査シート」に対する質問を提出
9月中旬	○各部局より「書面調査シート」に対する質問への回答を事務局へ提出
10月上旬～ 11月上旬	○学生インタビューの実施要領及び質問項目の確定 ○対象学生の募集 ○インタビュー参加学生への事前アンケートの実施
11月9日	●2023年度第2回外部評価委員会 ●学生インタビュー ※学生インタビュー後に会場を移動し、大学執行部に概要を報告

12月	○事務局から、「書面調査シート」に対する質問への回答を外部評価委員に提出
12月中旬～ 1月下旬	○「書面調査シート」、学生インタビュー結果をもとに外部評価委員から「所見」を事務局へ提出
1月下旬～ 3月上旬	○提出された「所見」を事務局で取りまとめ外部評価委員会及び大学で内容を確認し、外部評価報告書をまとめる。
2月中旬～ 3月上旬	●2023年度第3回外部評価委員会 ・内容：外部評価報告書を大学へ提出。
4月	○大学ホームページに外部評価報告書を掲載、学内外へ公表。

4. 本報告書の構成

本報告書は、以下の構成となっている。

- I. 2023年度東北学院大学外部評価に係る書面調査
- II. 学生インタビュー
- III. 2023年度東北学院大学外部評価委員会 委員による所見
- V. 2023年度東北学院大学外部評価委員会 総評

【別紙】

- 2023年度東北学院大学外部評価委員会 書面調査シート

【参考資料】

- ① 2023年度東北学院大学外部評価委員会 名簿
- ② 東北学院大学外部評価委員会規程
- ③ 2023年度第1回東北学院大学外部評価委員会 議事録
- ④ 2023年度第2回東北学院大学外部評価委員会 議事録
- ⑤ 2023年度外部評価委員会学生インタビュー報告書
- ⑥ 2023年度第3回東北学院大学外部評価委員会 議事録

I. 2023 年度東北学院大学外部評価に係る書面調査

第1回外部評価委員会で承認された2023年度の外部評価テーマに基づき、外部評価委員長より大学に対して、評価項目・観点に応じた質問を送付した。

書面調査シートは、外部評価委員と大学との間で複数回の質問と回答のやり取りを行い、次の項目で構成されている。

- ① 評価項目
- ② 大学からの現状説明
- ③ ②に対する外部評価委員からの質問
- ④ ③への大学からの回答

書面調査シートについては、本報告書【別紙】としている。

II. 学生インタビュー

第5期（2022～2024年度）外部評価委員会の評価対象としている「教学マネジメント体制の個別具体的な運用状況」を確認するため、内部質保証及び学修成果検証への学生参画に焦点を当て、学生インタビュー調査を実施した。

1. インタビュー実施概要

(1) インタビュー対象

本学在学生（学科・研究科より1名ずつ）…計27名（当日1名欠席）

※学科長、研究科長より推薦

(2) インタビューの実施方法

① 事前アンケート

外部評価委員からの質問について、対象学生へ事前アンケートを実施（Google フォームを利用したウェブアンケート）。事前アンケートの内容と結果は、【参考資料⑥】に掲載している。

② 学生インタビュー（グループインタビュー形式）

実施日時：2023年11月9日（木） 14時30分～16時00分

（当日スケジュール）

時間	外部評価委員	学生
14時00分	集合 8号館第1会議室	集合 8号館第3・4会議室
14時00分 ～14時30分	事前打ち合わせ 於：8号館第1会議室	事前説明 事務手続き（誓約書回収等）
14時30分 ～16時00分	学生インタビュー 於：8号館第3・4会議室 （2グループに分け、グループインタビュー）	
16時00分 ～16時30分	休憩	事務連絡、解散
16時30分 ～17時00分	インタビュー結果の大学関係者 への報告、外部評価委員での意 見交換等	

③ 参加学生の属性とグループ分け

Aグループ（学部1・4年生）：16名

Bグループ（学部2・3年生、大学院生）：11名

No	学部	学科	学年	グループ
1	文学部	英文学科	3年	B
2		総合人文学科	1年	A
3		歴史学科	1年	A

4		教育学科	3年	B
5	法学部	法律学科	4年	A
6	経済学部	経済学科	4年	A
7		共生社会経済学科	3年	B
8	経営学部	経営学科	4年	A
9	工学部	機械知能工学科	1年	A
10		電気電子工学科	4年	A
11		環境建設工学科	4年	A
12		情報基盤工学科	4年	A
13	教養学部	人間科学科	2年	B
14		言語文化学科	3年	B
15		情報科学科	4年	A
16		地域構想学科	4年	A
17	地域総合学部	地域コミュニティ学科	1年	A
18		政策デザイン学科	1年	A
19	情報学部	データサイエンス学科	1年	A
20	人間科学部	心理行動科学科	1年	A
21	国際学部	国際教養学科	1年	A
No	研究科	専攻	課程	
22	文学研究科	アジア文化史専攻	博士後期3年	B
23	経済学研究科	経済学	博士前期2年	B
24	経営学研究科	経営学研究科	修士 2年	B
25	法学研究科	法律学	博士前期2年	B
26	工学研究科	電子工学専攻	博士後期1年	B
27	人間情報学研究科	人間情報学専攻	博士前期1年	B

2. インタビュー項目

(1) 【観点1】学修成果の検証及び可視化

分類	インタビュー項目
成績評価	● 各授業科目でどのように成績評価がなされるのか、知ることができるか。先生方は授業で説明してくれるか。
	● 各授業科目でテストやレポートを行った際、先生方からフィードバックを受けていると感じるか。
	● 成績評価について教員間で違いがあると感じるか。また、そういう意見を聞いたことがあるか。
授業評価アンケート	● 大学では、授業改善アンケートを実施しているが、積極的に回答しているか。もし、授業改善アンケートに回答していない場合は、その理由は何か。
	● 授業改善のための学生アンケートが実際に授業改善につながっていると考えるか。

学修成果	● 自分の学科等が定めるディプロマ・ポリシーを知っているか。
	● 最終的にどのような成果を上げたら卒業できるか知っているか。
	● 学修成果は自らの学修目標に対応し、測定・評価（可視化）が可能な内容で把握されるが、可視化されない成果について、そこには限界が存在することについてどう考えるか。
	● 大学では学修成果の可視化（見える化）に取り組んでいるが、どのような取り組みがそれにあたっているか。
	● 学修成果を確認して、それ以降の学修の方向性確認や、モチベーション向上に役立っているか？ 役立っているとしたら、具体的にどのように役立っているか、具体例を挙げて欲しい。あまり役立っていないと感じているのであれば、その理由について考えていることがあれば、教えて欲しい。（大学側の課題、学生側自分自身の課題）
● 自身の学修成果を決定付ける要素として最も大きく占めるものは次のうちどれか？ A. 自身の学習努力 B. クラス内容の魅力（教員/コンテンツ） C. 学習環境（システム/サポート）	
アセスメント・テスト	● アセスメント・テストを受けたことはあるか。テストの結果を確認したり、振り返ったりしたことはあるか。
	● アセスメント・テストを受けてどう感じたか、複数回受けた場合に伸びを把握できるか。

(2) 【観点2】eポートフォリオの活用

分類	インタビュー項目
入力	● TG-folio に学習したことや課外活動を定期的に入力しているか。
活用	● TG-folio を用いて先生や職員さんと相談したことはあるか。
	● eポートフォリオの本来の目的と活用方法を理解しているか。
	● 学習コミュニティやキャリア意識形成に役立っているか。
	● 教員とのコミュニケーションを十分に活用しているか。
	● eポートフォリオの利点と活用シーンを教えて欲しい。
有効性	● 自分の学習やキャリアを考える上で、TG-folio が有効だと感じた経験はあるか。
	● 入力にかかる手間ひまと、その成果について見合ったものだと感じているか。
	● eポートフォリオを入力、作成して、良かったことがあれば具体的にあげて欲しい。（自分自身に関わることや、教員とのコミュニケーションに関わることなど）
	● eポートフォリオへの入力が自分の学習意識や今後の取組に影響を与えると考えるか。 教員からのフィードバックが自分の学習意識や今後の取組に影響を与えると考えるか。そう考えるとすればどういう点か。

改善点	● eポートフォリオの仕組みで改善してほしいところはあるか。あれば、具体的にあげて欲しい。
	● 改善が必要と思われる点、または今後必要と思われる機能があれば教えて欲しい。
高校との比較	● 高校時代に作成した eポートフォリオとは、利用目的や内容が大きく異なると思われるが違和感はないか。

(3) 【観点3】学修支援・研究指導に関する取組

分類	インタビュー項目
相談先	● 学習を進める上で困ったことや進路で相談したいことがある時、学内のどこで、誰が助けてくれるか知っているか。
	● 今まで学修を進める上で、困ったことがあったか。あるとしたら、どんなことで、その点について、誰かに相談したり、支援を受けたことがあるか。
	● 学習面で悩みが出たとき、どこに（誰に）相談しているか。学校の相談窓口は学生皆わかるようになっているか。
	● 学修過程で悩みや不具合が生じた時、誰に相談するか。 ① 家族や友人 ② 教員 ③ 教職員
	● 教員とのコミュニケーションを十分に活用しているか。
グループ主任制度	● グループ主任制度は知っているか。同制度は機能していると思うか。
	● グループ制で担当教員からアドバイスを聞いたことがあるか。受けたという話を聞いたことがあるか。あるとすればどのようなアドバイスだったか。
研究指導	● 【大学院生に対して】指導教員からどれくらいの頻度で、どのような研究指導を受けていますか。先生は丁寧に指導してくれますか。
改善点	● 学修について、このような支援があるといいなと思うことはあるか。あれば、具体的に教えて欲しい。
その他	● 学修に自主的・主体的に取り組んでいるか
	● 学修支援と研究指導についての違いを十分に理解しているか。

3. インタビュー結果

実施した学生インタビューの内容は、【参考資料⑤】に掲載している。

インタビュー実施後に 2023 年度第 2 回外部評価委員会において、当日のインタビューで得られた意見の概要、外部評価委員からの所感等を大学執行部へ報告を行った。

Ⅲ. 2023 年度東北学院大学外部評価委員会 委員による所見

テーマ：教学マネジメント体制の個別具体的な運用状況
 <内部質保証及び学修成果検証への学生参画>

1. 学修成果の検証及び可視化

<書面調査について>

評価者① (大学等の教育機関の教員)	<ul style="list-style-type: none"> ● 学修成果検証の仕組みが整備され、実際に全学レベル及び部局レベルで多面的に推進されていることは総じて評価できる。 ● 各授業の評価結果については、総合評価点(最大5点)が基準値3.0を下回った科目担当者に対して、学部長から勧告を行い、授業改善報告書の提出を義務付けており、評価できる。その一方で、実際の改善活動については教員個人に委ねてしまっており、学科長等が確認する仕組みとなっていない点にはさらなる工夫が求められる。 ● アセスメント・プランの取り組みはまだ緒に就いたばかりであり、具体的な成果につながっていない。今後組織的に統合的な取り組みが推進されていくことが期待される。 ● 出口質保証の仕組みに関連し、各学科において成績不振者への面接を学期ごとに丁寧に行う取り組み等を通して、近年修業年限内卒業率が上昇傾向にあることは、学生支援充実に基づく成果として評価できる。他方、学部・学科によっては DP 達成を担保するための取り組み(評価指標の共通化等)が明確に示されていない例が散見されることから、大学教育・大学院教育として求められる出口の質保証が実現し得ているのか検証することが望まれる。 ● 多様な学生調査の実施、学生協議会等における学生の意見聴取、グループ主任制度等を通じた学生支援の推進に見られる通り、学生の状況・課題の把握を推進する取り組みが多面的に行われていることは評価できる。 ● 書面調査における回答内容に基づく限り、学修成果の検証・可視化に関する内部質保証の仕組みについて、教学改革推進委員会と内部質保証委員会との役割分担が明確に整理されていない。アセスメント・プランに規定された指標の分析・検討は、今後「内部質保証委員会」で行うとしている一方、成績評価の適正化・平準化や GPA の活用については「教学改革推進委員会」で行っているとしている。また、入学生意識調査、卒業生意識調査、卒業生アンケート等の調査結果は、これまで「教学改革推進委員会」に報告されてきたようだが、それら複数のツールが点検・評価においてどのように使われ(「点検・評価委員会」から「内部質保証委員会」への報告ライン)、内部質保証システムに位置付けられているのかがわかりにくい。さらに、「学生協議会」(合同協議会)の位置づけも不明瞭である。各委員会の役割・機能を明確化し、内部質保証システムの適正化を進める工夫が求められる。
評価者② (大学に関して広くかつ高い見識を有する者)	<ul style="list-style-type: none"> ● 授業改善のためのアンケート結果を踏まえた対応は適切であると考えられるが、アンケート自体の回収率が低く、実態を反映したものであるのかという点ではやや疑問が残る。

特待生・優等生制度は、かつて採用する側であった時に成績優秀な学生であることについて、外部からは分かり易いものであったと記憶している。本制度は論功行賞的なものではなく、あくまで、学業成績を対象に客観的資料に基づいて判断されたものであり、成果の可視化という点のみならず、学生のモチベーションアップという点でも存続の意義はあると捉えている。

評価者③ (大学等の教育機関の教員)

- 授業改善のためのアンケートについて：
システムとしては完成しており、また、改善が必要な場合の授業勧告を出しており、学生へも HP による公表を行っている点は評価できる。課題としては、回答率が低いことと、授業勧告とその結果を、基準値 (3.0 未満) のみで評価していることについては、その是非を含め、検討が必要である。
- 成績評価基準について：
評価基準を明確に定め、教員と学生双方に周知していることは評価できる。その検証については、今後の課題である。GPA については、特に休退学の可能性のある学生の抽出に活用されていることは評価できるが、よりポジティブな活用については、今後の課題である。
- 卒業時の到達状況について：
資格取得については、各学部が工夫を凝らしながら、的確に支援していることは評価できる。その支援の結果をどう判断するか、さらなる資格取得に向けてどこまで支援していくのかは、大学が外部資格取得にどこまで注力するかを検討を含め今後の課題である。
特待生、優等生の表彰制度については、その成果を検証する必要があるのではないかと。学生たちのモチベーション向上につながる制度であれば継続とし、不公平感を抱く学生が多い場合には改変すべき時期に来ているように思う。
卒業後の就職、進学について、それぞれを希望する学生をきちんと支援し、成果を上げていることは評価できる。一方、どちらも希望しない学生への支援については今後の課題である。
- 出口質保証の仕組みについて：
学位授与方針を総合的・客観的に評価しうる授業の設定については、学部ごとに、設定されており、発表の工夫などもされていることは評価できるが、学部間での温度差があるように感じる。学部の個性であるので、一概にそれが課題とは言えないが、学生が、学位授与方針を理解し、自らがその基準に達したことを実感できるような仕組みは、学部を問わず、必要と思われる。学部を超えた、教員間の情報交換も有用かもしれない。
- 学生調査について：
アセスメント・テストをすべての学年で実施していることは評価できる。回答率が学年によってばらつきがあること、また、結果の活用については今後の課題であるが、すでに、回答率を上げる方法がとられているようなので、その結果に期待したい。
入学時、卒業時の学生調査については、回答率も高く、目的を達していると思われる。卒業生のアンケートについては、卒後 3 年というと、自分の生活だけで手一杯な時期であり、回答率が低いのは無理からぬこととも思う。ただ、大学の学修成果を確認する意味で、今後対象者の選定や、アンケート機会等、工夫して、回答率を上げる

	<p>ことが望ましい。卒業生の進路・就職先調査を実施していることは評価できる。結果の分析と、大学でその結果をどのように活用していくかは今後の課題である。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 教学に関する懇話会について： 様々な立場にある方々から大学の教育についてご意見を頂ける機会を設定し、その成果を、現場に活かしていることは評価できる。 ● 学生協議会について： 学生会からの要望をきちんと聞いて、対応していることは評価できる。
<p>評価者④（本学の学部を卒業した者又は大学院を修了した者）</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 学生へのアンケート回収率ですが他大学と比較した場合高いのか低いかを教示いただきたい。 <ul style="list-style-type: none"> ➤ （事務局回答） アンケート回収率はどこの大学でも課題となっており、本学も標準的な回収率であると認識している。なお、他大学で回収率を上げている事例としては、生涯メールアドレスを発行し随時情報発信を行い、これを利用した卒業生（卒業後数年経過）アンケートを実施したり、回答者に抽選でギフトカードなどをプレゼントすることで回収率を上げているといった例もある。 ➤ （委員より） アンケート回収率が標準値である事は分かった。また、各大学がアンケート回収率を上げる為に様々な手段で取り組んでいる事も分かった。 ● 学生へのアンケート回収率を高める取り組みで一番効果があったものをご教示いただきたい。 <ul style="list-style-type: none"> ➤ （事務局回答） 「卒業時意識調査」において、オンライン（LMS）でのアンケート実施後、未回答者は卒業式当日に、学位記の授与と引き換えに用紙での回収を行った。この結果、約 95%の回収率となっている。 ただし、他の調査では同様の方法が取れないため、学生への通知内容や配信方法の工夫等を行っている。必修授業やゼミ担当教員からの声かけを行った場合は、やや効果がある。 ➤ （委員より） アンケート回収率が文科省からの補助金の要件で 80%以上を求められている事もあり、各大学の重要課題として取り組んでいることも分かった。 ● 学生へのフィードバック方法、各種アンケートのついては様々な手段で告知を行っている取り組みは評価すべき点である。 ● ここ数年分の就職率をご教示いただきたい。 <ul style="list-style-type: none"> ➤ （事務局回答） 就職率は、2022 年度 95.6%、2021 年度 95.4%、2020 年度 94.8%となっている。 詳細は、FACTBOOK（P. 143） https://www.tohoku-gakuin.ac.jp/about/factbook/files/2022.pdf もしくは、大学ホームページの就職状況ページ https://www.tohoku-gakuin.ac.jp/career/data/06.html

	<p>をご参照いただきたい。</p> <p>➤ (委員より)</p> <p>就職率がほぼ 95%を超えており、かなり高い水準で安心した。</p>
<p>評価者⑤ (本学の所在する地域の関係者)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 授業改善のためのアンケートについてスマートフォンによるアクセスを可能とするなどの取組は評価できる。実施時期や取りまとめ方の工夫などにより更なる回収率の向上を図るとともに、大学又は学部として、平均点のみを見るのではなく学生インタビューにあった「資料の使い回し」や「授業内容の重複」など重要な問題点は確実に解消されるようピックアップする必要があると思われる。 ● 各学部の教育内容等が違うので演習も含め科目の設定や評価方法などが一律でないことは理解するが、担当教員によるバイアスや前例踏襲に陥りやすいことを意識して、より総合的客観的な評価に取り組む必要がある。その点、複数教員が評価に関わる取組は成果が期待される。 ● また、学生一人一人の成績評価にとどまらず、大学として学生の力を目標に向けてどれだけ伸ばすことができているのかを検証し改善していくことが重要という視点を大事にし、そうした意識を教員に広げていくことが重要であると考えます。
<p>評価者⑥ (本学の所在する地域の関係者)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 前向きに授業評価や授業改善に取り組んでいる教員も多くいると思うが、教員それぞれの考えや価値観が異なるため（それ自体は多様であって構わないのだが）、どうしても全教員が同じベクトルで進まない状況にあるのは理解できなくはない。しかし、学生は学ぶことに期待しているからこそ、教員間の授業力の差や大学の授業に対する理想と現実のギャップに落胆しているのだと思う。学生が抱く不満の多くは、学生とのコミュニケーション不足から生じるものではないか。シラバスに書いてあるのだから読めばわかると、学生のせいにするのではなく、また、上から目線で考えず、少数意見であっても学生の意見に耳を傾け、互いに納得感を得た形で「授業の主役である学生と一緒に授業をつくる」ことが大切だと感じる。他大学の先進事例を参考に、教員研修等を通じて、丁寧に説明し、教員の理解を得ていくほか方法はない。前向きな取り組みをしている先生方、頑張ってください。評価の仕方についても同様である。 ● 大学の教員は、授業だけでなく、自身の研究やその他で忙しく、アンケートに負担感だけを抱いていたり、授業評価への対応や授業改善に取り組むたいと思ってもできない状況があるのではないか。より良い方法を教員と学生の双方からの意見に基づき模索するしかないのではないか。
<p>評価者⑦ (経済界の関係者)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 全体所感からすると、入学時の川上から卒業・就職へ向けた川下の支援に至るまでほぼ網羅的かつ隙の無い全学的なシステムが整っていると感じる（自身が在学していた当時、20 年前にはほぼ整備されていない、もしくはシステムの存在を知らなかった…）。 ● 「学修システム概要と定義」を以下のように文章で自分なりにまとめてみたものの、ビジュアル化して貴学 HP 等にアップすることで学生（候補者）にとっても全学的なサポートの全体構造がよくわかり、（在学当時の私のような）互いの齟齬や認識不足がより一層補われるように思う。

<p><貴学における学修システム概要と定義></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. ディプロマ・ポリシー：学位授与方針 2. アセスメント・プラン：評価計画（全学/学位/授業）→ グラフによる可視化 3. アセスメント・テスト：知識・行動測定 → 学生へのフィードバック利用 4. アカデミック・サポート・デスク：学習相談対応（論文/PC/勉強方法） 5. eポートフォリオ（TG-folio）：目標設定と進捗管理 *今年度より新設 6. manaba：授業評価アンケート（評点 3.0 未満で教員へ「授業改善勧告」） 7. GPA：成績表価値 8. ディプロマ・サプリメント：学位付属資料 → 就活時提出資料 9. 就職キャリア支援：キャリア、進路相談 10. ルーブリック：アクティブ・ラーニング（議論/体験/伝達）*学部/教員による部分導入 <ul style="list-style-type: none"> ● 一点、改善が必要と思われる点は「GPA（成績表価値）」の取り扱いと位置付けに関して。海外への留学や交換留学などグローバル人材の育成を視野に入れた場合、世界的にも重視される事が多い共通指標「GPA」が入試関門（例：3.0 未満だと試験資格がない、等）であるケースが多く、今後本指標の重要性を学生たちにも認知させ、日々の授業評価を高めさせることによって将来の選択肢が広がるという点を貴学の KPI の一つに掲げて頂くことを願う（事実、私はその要因で米国留学時に志望校を断念した…すなわち、卒業さえすれば OK という価値観は世界規模では通用しない）。
--

<学生インタビューについて>

<p>評価者①（大学等の教育機関の教員）</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 学生から見て学修成果の可視化として最も身近なのが各授業科目や卒業論文・研究等の成績評価（GPA）であり、学生インタビューでも教員間における評価のばらつきや基準の不透明さが課題として指摘された。学修成果の検証という観点から、成績評価基準の平準化や透明性の向上は、全学教員会議やその他の FD の機会を使って働きかけていくこと、また、教学改革推進委員会から各部局レベルの取り組みを促していくことが必要である。 ● 「授業改善のための学生アンケート」の活性化については、学生インタビューからも、教員側の授業改善に向けた真摯な態度が鍵になることが読み取れた。教員が実際に改善を図っていることは学生にも伝わっており、ひいては、学生がアンケートに回答しようとする姿勢を形成している可能性について教員側も認識を新たにしていくこと、大学はそのための機会を提供していくことが重要である。 ● 学修成果の可視化について学生インタビューからは、成績評価や GPA といった数値化と合わせ、学生自身の経験を通して成長を認識していくプロセスの重要性にも言及された。今後の取り組みの参考にしていくことが望まれる。
<p>評価者②（大学に関して広くかつ高い見識を有する者）</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 授業改善のためのアンケート結果を踏まえた取り組みについては、教員毎に温度差があること。また、教員の取組姿勢や意識は、日頃の些細な場面において学生には鋭敏に伝わっていることもインタビューを通じて改めて認識した。日頃から教員はその背中を常に見られていることを心に銘記すべきと思う。

<p>評価者③ (大学等の教育機関の教員)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 授業改善のためのアンケート： 教員の姿勢が、学生の回答への意欲に大きく関わっていることが課題として挙げられる。アンケート回答のための時間を確保し、真剣に取り組む姿勢を教員が見せることが必要である。翌年度改善状況を確認している学生がいることを、教員は意識した方がいいと思う。 ● 成績評価： 成績評価基準が明確でないこと、教員により評価のばらつきがあることが、学生たちからは課題として挙げられていた。いずれも、難しい課題であるが、FDなどを通して、成績評価基準の明確化について教員が学ぶとともに、特に、同じ科目の授業を複数の教員が実施している場合は、関係する教員のグループでの話し合いと一定程度の合意が必要かと思う。 ● 現時点での到達状況： 大学で準備されている様々な指標も一部には活用されているが、学生たちとしては、取得単位数、GPA、外部資格の取得や、発表機会での成功体験などで、自らの成長、到達状況を実感しているようだった。そのあたりの、成長実感については、在学時や卒業時の学生調査項目を工夫することにより明確にできるかもしれない。
<p>評価者④ (本学の学部を卒業した者又は大学院を修了した者)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 成績評価・授業評価については学校側と学生の間で大きな隔たりがあると感じた。特に結果のフィードバックに関してはしっかりとした対応している先生もいるが、曖昧な対応をする先生に不満を感じている学生が多数いたのは残念であった。お互いに密なコミュニケーションをとれる体制作りを大学側として提案すべきである。
<p>評価者⑤ (本学の所在する地域の関係者)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● インタビューに参加した学生たちは、目標意識が明確で大学での授業や各種活動に概ね満足しており、自分の成長についても必ずしも用意されたシステムやツールによるものではないが実感しているようであった。
<p>評価者⑥ (本学の所在する地域の関係者)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 「グループの成績が自分の成績になってくるのは納得できない」という不満や、「申し立てをしても当たり障りない回答だったのでそれ以来していない」とか「意見を書いても変わらない」というあきらめを学生が持つのは、この点を評価するのか事前に学生に周知できていない、つまりコミュニケーション不足からくるものではないか。または、学生時代に勉学に励んだ自身と目の前にいる学生を比べて、上から目線の物言いになっているか。または、時代が変わっているにもかかわらず、自身が学生時代に受けた授業からアップデートできていない教員がいるからではないか。「物言わぬ学生は満足している」とは決して限らない。少数かもしれないが、物言う学生の意見に耳を傾け、真摯に対応、改善策を講ずるほかない。 ● 大学院の授業で、社会人の院生と共に学ぶストレートマスターの意見があった。社会人経験がないが、それでも大学院に入った院生の本音だと思う。土日の授業を含め、ストレートマスターが社会人の院生と一緒に学べるメリットをもっと活かせる方策の検討を望む。
<p>評価者⑦ (経済界の関係者)</p>	

<ul style="list-style-type: none"> ● 学生インタビューに推挙された学生はさすが勉学面・姿勢面ともに“超優秀”な生徒が多く、大変建設的かつ具体的な意見が聴取出来た。まずは召集・参画頂き、貴重な時間と経験をさせて貰えた点に感謝を申し上げたい。特に勉学面においては（私の仮説とは裏腹に）その授業内容に関して非常に面白がって受講されている生徒が大半で、「各自のキャリアパス（学ぶ目的）と授業内容（学ぶ手段）が合致しているか否か？」が充実した大学生活を送る上での最たる要素である事を感じ取れた。反面、上位 3%の超優秀に入らない生徒たちの率直な声も聞いてみる必要があると感じた。 ● 学部・学科によっては勉学面以外のイベントも盛んとの事で（ボランティア、模擬授業、フィールドワークなど）、学生にとっても大変好評のようであり、個人的にも興味深かった。なお貴学からの回答コメントを拝見するに、一部の学部・教員によっては段階的にルーブリック（アクティブ・ラーニング）なるものを導入しているとの事。私が個人的に考える日本の教育の最たる課題は「教育＝正解を教える」という定義のもと全てが設計されている点だと考えるが、広く社会・世界に出てみると「教育＝自ら問いを立て、正解を追求する」点にこそ価値が見出されていると断言できる。その点において「ルーブリック（≒議論/体験/伝達）」の要素がクラス外の活動において徐々に浸透されてきている潮流を歓迎したい。加えて是非今後、クラス内においてもそのトレンドが加速されることを期待したい。
--

2. e-ポートフォリオの活用

<書面調査について>

<p>評価者①（大学等の教育機関の教員）</p> <ul style="list-style-type: none"> ● e-ポートフォリオ（TG-folio）の導入・整備を進めてきていることは評価できる。他方、今後、学生による e-ポートフォリオ（TG-folio）への入力率を上げる工夫をしていくことが望まれるものの、入力率向上はあくまで手段であり、学生自身の学習活動や成長についての振り返りを促し、教員等が学習・研究・進路指導等に活用することを通して e-ポートフォリオの実質化を図っていくことが求められる。
<p>評価者②（大学に関して広くかつ高い見識を有する者）</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 学びの記録を電子化し、教員と情報共有しながら進学準備や就職活動に活用していくことを鑑みれば、今後未入力は許されないものと思われる。全ての学生に入力を義務付ける取り組みが必要ではないか。
<p>評価者③（大学等の教育機関の教員）</p> <ul style="list-style-type: none"> ● e-ポートフォリオのシステム導入については、評価できる。期待している効果が発揮できるよう、学生の理解の促進に努め、記入率（利用率）を高めていく対策が必要である。
<p>評価者④（本学の学部を卒業した者又は大学院を修了した者）</p> <ul style="list-style-type: none"> ● e-ポートフォリオの活用は大学側として最重要課題として位置付けているのを感じた。その意図を如何にして数多くの学生たちに浸透させて将来に役立たせるのが大学側の使命である。
<p>評価者⑤（本学の所在する地域の関係者）</p> <ul style="list-style-type: none"> ● e-ポートフォリオを含め、制度やシステム、ツールについては積極的に取り入れられており、高く評価できる。これを学生が、目的を理解して主体的に活用することによ

	<p>り自らの力を高めることが重要であるが、それについてはスタートしたばかりであると言える。学生、そしてできる限り多くの教員がこうした仕組みを有効活用することにより、学生の気付きや前向きな努力、そしてよりよい将来につなげていくことが期待される。</p>
<p>評価者⑥ (本学の所在する地域の関係者)</p>	
	<ul style="list-style-type: none"> ● うまく活用できた学生には大いに役立っていることがうかがえる。だからこそ、学生向けのイベントやラーニングコモンズでの説明だけでなく、活用事例や卒業生の動画などを、いつでもどこでも見て参考にできるサイトを設置したり、活用強化月間を設けたりするなど、もっと活用を支援する方策を検討したらどうだろうか。入学時、他律的な学生が多いのではないか。そうした学生が自律的になるまで、特にスタートの時期、ある一定期間の支援が必要だと思う。
<p>評価者⑦ (経済界の関係者)</p>	
	<ul style="list-style-type: none"> ● 今年度から新設され、1 年生から順次採用されている「e-ポートフォリオ」に関しては退学危険者の事前抽出や未然予防はもとより、学生自らが目標を設定&振り返りを行い、進捗管理を行いつつ、結果を就活時に活用できる (ディプロマ・サプリメント) ツールとして学生・大学・企業にとっても非常に有用なシステムであると感じた。 ● 「e-ポートフォリオ」の更なる実用的な効果としては学生に対する在学中の啓発支援はもとより就活時、企業・その他受け入れ先に対するポートフォリオの存在認知が重要と考える。今後、年を追って提出母数は増えてゆくものと期待するが、他校との差別化にも繋がるため積極的な PR をお願いしたい。

<学生インタビューについて>

<p>評価者① (大学等の教育機関の教員)</p>	
	<ul style="list-style-type: none"> ● 学生たちも発言していた通り、TG-folio はまだ十分に定着しておらず、活用可能性を多く残していると思われる。学生の中には 1 年生時点から積極的に使ってみたいという声もあることから、DP への関心・認知度を高めるとともに、学生の振り返りを促すツールとして使用を推進していくことが考えられてもいい。
<p>評価者② (大学に関して広くかつ高い見識を有する者)</p>	
	<ul style="list-style-type: none"> ● 大学としては非常に有用なものであるからこそ、多大な費用を掛けても導入している。よって活用不十分な学生が相当程度存在することは、大学としても大きな損失である。導入後間もなく様々なデータの電子化移行という過渡期ではあるからこそ、学生へ e-ポートフォリオについて教宣、浸透させる機会を積極的に設け、早期に全体として有効に利活用されることを期待する。
<p>評価者③ (大学等の教育機関の教員)</p>	
	<ul style="list-style-type: none"> ● e-ポートフォリオについては、学生によって、その評価や活用方法にばらつきがあるようなので、今後、さらに丁寧に、説明、推奨して、活用を促進していく必要がある。
<p>評価者④ (本学の学部を卒業した者又は大学院を修了した者)</p>	
	<ul style="list-style-type: none"> ● Aグループは 1 年生と 4 年生だったが共通点があった。早い段階で目標設定を決めて e-ポートフォリオを盛んに活用し学習成果を可視化しながら目標に向かっている学生

	もいれば、そうではない学生は e-ポートフォリオの活用はほとんどしていない学生もいた。如何にして e-ポートフォリオを活用するかは本人次第と感じた。
評価者⑤ (本学の所在する地域の関係者)	● インタビュー対象者が、e-ポートフォリオを使用していない学年であった。
評価者⑥ (本学の所在する地域の関係者)	● 記載なし
評価者⑦ (経済界の関係者)	● 今回インタビューを担当した「Bグループ (2～3 年生、院生)」は利用対象者外のため、コメント無し。ただしシステムの概略と機能、効果を伝えたところ大半の生徒が「興味がある、利用してみたい」との反応であった。

3. 学修支援・研究指導に関する取組状況

<書面調査について>

評価者① (大学等の教育機関の教員)	● グループ担任制度やアカデミックサポートデスクを設けて学修支援の機会を充実させていることは評価できる。今後は、上述した TG-folio の普及を進め、各学生のデータを蓄積・共有しつつ、学生、教職員、学修支援スタッフが連携して取り組めるシステムの構築・運用が求められる。
評価者② (大学に関して広くかつ高い見識を有する者)	● e-ポートフォリオを活用して学修支援につなげた具体的事例として、関係各課によるフォロー体制を構築していることも 1 つの事例であるとは思われるが、実際に学生個人からの相談等に対し、e-ポートフォリオが有効に機能した (支援につなげた) 事例を把握されているのであれば、回答として示してほしかった。
評価者③ (大学等の教育機関の教員)	● 学修支援体制について：様々な支援体制が組み込まれているようで、評価できる。グループ主任制度を設置していることは評価できるが、学生は、どうしても、決められて教員より、自分が話しやすい教員に相談に行くことになるのは致し方ないかもしれない。発達障害のある学生が、増加してきていると言われている。実態把握と、今後の支援策について、検討していくことが必要かもしれない。
評価者④ (本学の学部を卒業した者又は大学院を修了した者)	①グループ主任の任期は決まっているのですかご教示下さい。
評価者⑤ (本学の所在する地域の関係者)	● グループ主任はあまり機能していないように見受けられる。学生からの相談の一次窓口としての教員、職員を設置することは大事なことだが、聴く力や受容する力が必要だと思われ、人選や研修などによる質の向上に配慮を要すると考える。 ● 7割以上の学生がラーニングコモンズを利用したことがない状況が、そこに相談しなくても問題なく履修できているのか、あるいは窓口の周知に課題があるのかなど、改善の必要性の有無を確認しておくといいのではないか。
評価者⑥ (本学の所在する地域の関係者)	● ラーニングコモンズを活用した様々な支援が行われているようだが、学生の利用が増

	<p>えず、せっかくの大学の支援が学生まで行き届いていないのが残念である。内容なのか、場所なのか、開催時期なのか、それとも他に理由があるのか、改善策を学生に主体的に考えてもらうなど、どうしたらいいのか学生に直接意見を聞いたらどうだろうか。</p>
<p>評価者⑦（経済界の関係者）</p>	
	<ul style="list-style-type: none"> ● グループ主任制度は古くから整備・設定され、長らく運用されてきたものと思うが、私見と経験から言ってさほど機能はしていない。 その理由として： <ul style="list-style-type: none"> <学生側> <ul style="list-style-type: none"> ▪ 互いにバックグラウンドを知らず、相談対象として見ていない（担任制度との違い） ▪ どこにいるのか、また連絡手段がわからない（キャンパスは広い、タイミングも希少） ▪ 何をどこまで相談して良いか、わからない（ただでさえ教員は忙しそう） <教員側> <ul style="list-style-type: none"> ▪ 優先順位の最上位は各自の教育と研究（貴学回答コメントに記載の通り） <p>故にここは既に運用済みと見られるラーニング・コモンズの「アカデミックサポートデスク」の存在認知を高め（現状 3割未満）、都度集約された学生からの相談ニーズに応じて徐々に機能拡充し、かつ教員側の負担軽減を図る策が賢明に思う（そもそも教員側の優先順位付けが 1 番の問題点であり、最たる課題だとは思いますが…）</p>

<学生インタビューについて>

	<p>評価者①（大学等の教育機関の教員）</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 学生支援に対する学生自身の評価は概ね高く、学生の学習や研究を支える大学側の体制整備が評価されている。五橋キャンパスの設置もあり、充実した環境を提供できていると判断される。他方、大学施設の利用時間延長や大学院生の研究活動（研究費）支援を求める声もあったことを踏まえ、大学としてできるところから真摯に対応していくことが求められる。
	<p>評価者②（大学に関して広くかつ高い見識を有する者）</p> <ul style="list-style-type: none"> ● グループ主任制度は修学支援策として、大きな柱の一つと考えられるが、「有効なコミュニケーションツール」として実際に有用性があるかという点では、難しい印象を受けた。制度としての意義はあると考えるが、随時有効に機能しているかどうか効果の検証、他の対応策がないか等の検討も必要と考えている。
	<p>評価者③（大学等の教育機関の教員）</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 学修支援については、学生たちは、現状に満足している様子がみられた。大学施設の利用時間延長については、防犯・人材など、様々な課題があり、一概に 24 時間運営をする必要はないと思うが、その件について学生たちの理解を得ることは必要だと思う（限られた時間の中で、やるべきことはやり終える習慣や、夜間は自宅で休養する必要性など）。
	<p>評価者④（本学の学部を卒業した者又は大学院を修了した者）</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 今回インタビューに参加した学生は満足しているようであったが、夜遅くまで研究し

	<p>ている学生からは退室時間を遅らせて欲しいとの要請があった。</p>
<p>評価者⑤（本学の所在する地域の関係者）</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 院生への支援、指導については、少人数であるからか事例の積み重ねがやや弱く感じた。専門性を高めて次のステージ（研究活動の継続や就職など）につなげるためにも、教員が他大学や研究機関、企業とのネットワークを持つことが求められる。ただ、インタビューでは、教員が多忙であるとの意見が多かったので、多忙の要因を調べて改善することが必要ではないかと考える。 ● 学生が途中でリタイアすることなく力を付けて社会に出ていけるよう、学生同士での支え合いや担当教員の働きかけのみでなく大学としての支援を求める声があったが、既に全学的な対応の検討が始まっているとのことなので、たくさんの多様な学生が入学してくる中難しい面も多々あると思うが、ぜひ取組を進めてほしい。
<p>評価者⑥（本学の所在する地域の関係者）</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 「他学科との交流がない」という意見があった。今後は交流が予定されているのかもしれないが、キャンパスを集約したメリットが感じられない。文理融合の科目の設置など、単にイベントとしての交流ではない交流を期待する。
<p>評価者⑦（経済界の関係者）</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 学部生に対する学側からの全方位的かつ手厚いサポートに相反して、院生に対して向けられているサポートへの満足感は薄く、ある種疎外感を感じているような印象さえ受けた（サポート体制の格差や情報量の格差）。そもそも院生と学部生では勉学の目的（研究や専門性）や環境（大人数<少人数）、将来的なキャリア（≠全員が就活）も含めて全くニーズが異なる。ついては学内でマイノリティであるが故に孤立しがちな院生に対し、新たな設計思想を持ったシステムの構築もしくは個別にキャリア相談ができる Face to Face のサポートで、ハード&ソフトの両面から彼らの志を支援してあげて欲しい。

IV. 2023 年度東北学院大学外部評価委員会 総評

外部評価委員会委員長 杉本 和弘

第5期外部評価委員会（2022-2024 年度）では、第4期外部評価委員会（2019-2021 年度）からの引き継ぎを踏まえ、全学及び学部・研究科における教学マネジメント体制の個別具体的な運用状況を評価対象に設定した。その上で、第5期初年度にあたる 2022 年度は、教学マネジメント体制の個別具体的な運用状況として、全学及び学部・研究科における教学マネジメント体制、特に「事務職員の育成・資質向上の取組」や「教職員の能力開発（FD 及び SD）に係る実施状況」について検証し、その到達点と課題を指摘した。

このことを踏まえ、第5期2年目の 2023 年度は、近年の大学教育における内部質保証の重点課題である「学修成果の検証及び可視化」、「e ポートフォリオの活用」、それらに基づく「学修支援・研究指導に関する取組」について書面調査を行った上で、特に学修成果検証への学生参画の観点から学生インタビュー調査を行うこととし、学生から直接意見聴取した。

以下では、2023 年7月 13 日及び 11 月 9 日に開催された都合2回の外部評価委員会における意見交換や学生インタビュー、さらにそのプロセスを経て外部評価委員諸氏から提出された評価所見を踏まえつつ、大きく3つのトピックによる評価項目ごとに内容を整理した上で（評価項目に関する詳細な観点は本報告書 pp. 3-4 参照）、最後に総評を行いたい。

1. 教学マネジメント体制における学修成果の検証・可視化及び学生参画について

(1) 学修成果の検証及び可視化

学修成果の検証・可視化の取組については、全学レベル及び部局レベルで多面的に整備・推進されていることが外部評価委員から評価された。全学レベルでは、授業改善のためのアンケートや各種学生調査の実施、アセスメント・テストの実施、教学に関する懇話会や学生協議会の開催による学生の意見聴取等を通して、学生の状況・課題の把握を推進する取組が行われている一方、部局レベルでは、成績評価基準を明確に定めるとともに、学位授与方針（DP）を総合的・客観的に評価しうる授業を設定して DP 達成状況を把握する取組が展開されている。また、実際の学修成果を示すものとして、出口（卒業・修了時）における資格取得数や卒業率・就職率も高い（あるいは向上しつつある）ことも確認でき、委員からは評価する声が聞かれた。

他方、いくつかの課題も指摘された。特に、①授業改善のためのアンケート回答率が低いことやアンケート結果への対応、②アセスメント・プランの実質化、③（一部部局で不十分な）DP 達成を検証するための評価指標の明示、④特待生・優等生表彰制度に関する成果検証や改善、⑤ GPA の重視・積極的活用等の必要性である。加えて、大学外の外部評価委員からは、こうして近年様々に導入された諸制度のほとんどがカタカナ語で表記されていて理解しづらく、学生への浸透・理解を促すためにも、⑥関連用語の整理と解説をわかりやすく提示する必要があることも指摘された。

こうした課題は学生インタビューにおける学生の声からも確認できた。例えば、授業改善アンケートへの回答率や効果を高めるには、教員側の授業改善に向けた真摯な態度や意識、結果に関する学生への明確なフィードバックが鍵になること、学生の目から見て一部の授業科目において成績評価の透明性や公平性が担保されていないと見られていること等が明らかになった。こうした学生の声も踏まえつつ今後も改善を進められることを期待したい。

(2) eポートフォリオの活用

eポートフォリオ (TG-folio) の導入・整備については、実際に一部の学生によって学びや成長の気づきや振り返りに活用されていること、退学危険者の事前抽出・予防に活用できることから、委員からも高く評価された。他方で、学生による e-ポートフォリオ入力率が必ずしも高くないことから、①活用事例の発信や活用強化月間の設定を通じた学生による認知向上、②就活時における企業等への広報強化、さらには③入力義務化も含めて入力率向上を図っていくことへの期待が寄せられた。もとより、e-ポートフォリオの実質化に向けては、④学生向けのイベントやラーニングコモンズ等における広報・啓発に加え、⑤教職員が積極的に学習・研究・進路指導に活用していくことも必要であろう。

実際、学生インタビューにおいても、eポートフォリオに対する学生からの評価にばらつきがあり、同システムの本格的な活用・定着は今後の課題であることが確認された。

(3) 学修支援・研究指導に関する取組

学修支援・研究指導に関する取組については、グループ担任制度、ラーニングコモンズ「アカデミックサポートデスク」の設置等、多様な学修支援の機会が設けられていることが評価された。ただ同時に、委員からは、学修支援システムを十全に機能させるべく、①グループ主任制度の検証と強化、②学生のラーニングコモンズに対する認知・活用向上、③ラーニングコモンズとグループ担任制度の連携強化、④教職員の聴く力を高めるための研修といった取組が必要であることも指摘されており、今後のさらなる改善課題として前向きに対応していくことが望まれる。

学生インタビューにおいては、学修支援に対して概ね高く評価する声が聞かれた。他方で、員数の少ない大学院生に対する支援はやや手薄になっている印象があり、大学施設の利用時間延長等への要望を含め、大学としてできる限り学生のニーズに応え、学生の理解を得る工夫を図っていくことが求められる。

2. 総評

上述の通り、第5期外部評価2年目の2023年度は、「学修成果の検証及び可視化」、「eポートフォリオの活用」、「学修支援・研究指導に関する取組」の3つのトピックに焦点を当てて評価を行った。評価プロセスでは、書面調査を通して3つのトピックに係る取組を担当している部局等からの説明と質疑を行うとともに、外部評価委員が学生に直接インタビューを行う機会を設けた。学生インタビューは、書面調査で十分に明らかにならなかった点について学生から意見や要望を直接聴くことで実像に迫ることができる機会であり、外部評価として極めて有効であった。外部評価委員からの質問に丁寧に回答いただいた部局等の関係者、外部評価に協力し率直な意見を聞かせてくれた学生たちに心より御礼申し上げたい。

こうした評価プロセスを通して明らかになったことは、東北学院大学において学修成果の検証・可視化や学修支援・研究指導の仕組みや取組が丁寧に整備され、多面的に実践されている一方、そこにはまだ改善・工夫の余地が少なからず残されているということである。とりわけ、「学修者本位の教育」という観点から学生自らが学修成果を実感できる教育研究体制の構築に向けて歩を進めていく必要があり、そのためにも、今後はグループ担任制度やeポートフォリオといった、これまでに整備されてきた諸制度の実質化を図っていくことが求められる。加えて、諸制度（教育質保証のためのツール）の普及や実質化に努めつつ、一定期間後には、それらの活用状況や費用対効果を検証していくことも必要となろう。昨今の大学教職員は年々多忙化を極めていることを考えれば、活用率や効果の低い取組に教職員の労力が割かれてしまうことも避けなければならない。

いずれにせよ、今次の外部評価が対象とした上記トピックは、突き詰めれば、大学の本丸に位置づく活動であり、学生による学修や研究の成果をどう担保し向上させるかは東北学院大学の真価を左右すると言って過言でない。かかる取組が不十分であれば、将来の進学希望者を含む学生からの信頼を失い、大学としての社会的信用を毀損しかねない。それだけ大学として威信や矜持をかけた継続的な取組が求められることを肝に銘じ、内実を伴った粘り強い改善を推進されていることを期待したい。

以上

【別紙】

2023 年度東北学院大学外部評価委員会
書面調査シート

2023年度外部評価委員会 書面調査シート

No	分類	調査項目	観点	質問	回答	回答部署	外部評価委員からの追加質問	追加質問回答
(1)-1	学修成果の検証及び可視化	授業改善のための学生アンケート	実施の単位、時期・回数、集計・分析、結果の活用状況	授業改善のための学生アンケートの集計結果をどのように分析し、活用しているか？	※実施単位、時期・回数はアンケート実施要領を提出 朝日ネット社のmanabaを利用し、前期科目、後期科目および通年科目のすべての授業（大学院科目を除く）で授業アンケートを実施している。また、年度毎にアンケート結果を報告書として公開しており、アンケート結果に基づき授業改善及び授業担当教員の表彰についての要素としても活用している。教員自らアンケート結果を確認することが可能で、授業改善の一助となっている。	学修支援課、政策支援IR課	①授業アンケートの実施率もしくは回答率（ここ数年分）をご教示ください。 ②アンケート結果に基づく「授業改善」がどのように実施されているのか（誰からどのような内容で実施されるのか、報告による実際の授業改善事例等）、ご教示ください。 ③教員がアンケート結果に従って授業改善を行っていることはどのように確認していますか。 ④個々の教員に対し、アンケート結果を踏まえた授業改善報告をどのような形で実施していますか。報告している場合に授業改善状況の検証はどのように行っていますか。 ⑤授業改善アンケート結果への学生のアクセスはどのようになっていますか？ ⑥大学として学生アンケートが授業改善につながったと把握している具体例を教えてください。回収率を高めるための取組は行っていますか。 ⑦分析及び活用は教員任せになっているのですか。また、どのように分析しているかご教示ください。	<学修支援課> ①回答率 例：2022年度は 前期全体：回収率34.0% 後期全体：回収率26.7% ②授業改善 ・各科目に対する授業評価結果を記した個票の中の総合評価点(最大5点)が基準値3.0を下回っている場合に報告を実施する。 ・改善が必要な科目については、学部長を通して担当教員に総合評価点が基準値3.0を下回っていることを報告し、授業改善計画書を学部長に提出することを義務化。 ・学部長は授業改善計画書を見て指導し、次年度の授業アンケートで学生による評価が基準値を下回っていないことを確認。 ③改善の確認 ・授業担当教員個々のPDCAとなることより、学部長が確認するなどはしていない。 ④個別の教員への対応 ・改善が必要な科目については、学部長を通して担当教員に総合評価点が基準値3.0を下回っていることを報告し、授業改善計画書を学部長に提出することを義務化。 ・学部長は授業改善計画書を見て指導し、次年度の授業アンケートで学生による評価が基準値を下回っていないことを確認。 ⑤学生へのアクセス ・HPによる公表（科目部門） ・冊子体による公表（科目部門と個票＝2020、2021年分は編集業者の変更に伴って公表を忘れていた） ⑥改善と取り組み ・以前より総合評価点3.0未満の評価を受ける科目の数が減った。最近では前期と後期を通じて1科目程度である。 ・回収率を高める取組として、スマートフォンから簡単に授業アンケートにアクセスできる手順を学生と教員に知らせ、回答に協力してもらうよう促した。 ⑦分析及び活用 ・各年度のアンケート結果を教員が分析し、「授業改善のための学生アンケート」結果報告書を作成している。
(1)-2	学修成果の検証及び可視化	成績評価	アセスメントポリシー/プランの活用状況	アセスメントポリシー/プランで定めている各項目をどのように分析し、学修成果の可視化を行っているか？	2022年度に制定したアセスメント・プラン(別紙)において、入学時/在学時/卒業時・卒業後の大学全体レベル/学位プログラムレベル/授業科目レベルでAP、CP、DPについて測定・評価を行うこととした。アンケート調査やアセスメントテスト、指標等ごとに毎年度結果をまとめグラフ等で可視化している(学年別、学科別、入試区分等)。教学改革推進委員会で報告するとともに、一部はFACTBOOKへ掲載、大学ホームページで公開、学生ポータルで学生にフィードバックなどを行っている。	政策支援IR課	①アセスメント・プランの実施状況やその結果精査を行っているのは、教学改革推進委員会ですが、あるいは内部質保証委員会ですか。両委員会の関係や役割分担はどのように整理されていますか。 ②アセスメント・プランで定められた、授業科目レベルにおける「各種入学試験結果」の活用事例についてご教示ください。 ③リテラシー、コンピテンシーの観点からの能力測定・評価は行っていますか。 ④学生へのフィードバック方法では、どこまでを知らせていますか？それに対する学生の反応はありますか？ ⑤アセスメントプランの制定からもないですが、これまで個別に把握してきたデータ(11-5から9)などから見て、改めて課題だと捉えている点を教えてください。	①アセスメント・プランの策定後、各項目を網羅した結果精査はまだ行っていません。ただし、各項目に定めた指標についてはこれまで教学改革推進委員会で報告を行っています。今後は、内部質保証委員会において、教学マネジメントを推進する立場から、各指標の分析結果の内容確認と対応の検討等を行うこととしています。 ②入試区分に応じた各種分析は行っているものの、入試データをIRで整備できていないため、入試結果を用いたアセスメント・プランにもとづく評価はまだ行っていません。 ③リテラシー(知識の活用)、コンピテンシー(行動特性)については、アセスメント・テスト(ベネッセi-キャリアのGPS-Academic: https://www.benesse-i-career.co.jp/gps_academic/about/)を用いて測定を行っています。 ④学生へのフィードバックについては大学ホームページや学内ポータルサイト、アセスメント・テストについては本人への結果レポート、GPA等についてはeポートフォリオで行っています。学生からの反応は特にありません。 ⑤アセスメントプランに沿ったデータ収集が完了しておらず、課題の抽出を実行している量のため、まだ課題と認識している点はありません。
(1)-3	学修成果の検証及び可視化	成績評価	成績評価基準の活用状況	成績評価基準(大学全体、学位プログラム単位、授業単位)はどのように定められ、運用されているか、また検証は行っているか？	①「授業における成績評価の方針」に基づく公平かつ妥当な成績評価実施に向け、それを支援する環境を整えている。2021年度には、各授業の評価点の適正化を目指し、採点入力後のGP平均値の表示を実施し、更に適正なGP平均値として2.5～3.0を設定することを全学合意した。また、複数教員が共通の達成目標に基づいて実施する全学共通科目においては、各教員のGP平均値が公表され、突出する値についてはその原因について検討することとしている。ただし、これらの施策の効果についての検証は未だなされていない。 ②運用上の周知については、毎年4月に開催する「全学教員会議」において、授業運営に関する諸注意を含めて学務部長から説明している。	教務課	①成績評価の方針に関する適正な運用を検証しているのはどの学内組織ですか。全学共通科目、各学部(研究科)の科目それぞれについてご教示ください。 ②成績評価基準について、学生にはどの程度説明し、学生は適切に理解していますか？ 学生の理解度の確認は行われていますか？ ③回答の①で「施策の効果についての検証は未だなされていない。」となっていますが、それはなぜかご教示ください。	①科目ごとにGPAの平均を算出し、それらの標準化について教学改革推進委員会において検証をおこなっている。 ②入学時のオリエンテーション等に学生に説明するとともに、学生手帳(今年度からはpocketTGUというオンラインアプリ)にも記載されている。また、評価基準は各々のシラバスに明記され授業時に確認している。成績評価の方法・基準については、2022年度「授業改善のための学生アンケート」の質問項目「あなたは、この授業の成績評価の方法・基準を知っていますか」において、「よく知っている」「ある程度知っている」の合計が全科目の89.3%、後期で91.7%を占めていたことから、ほとんどの学生に理解されていると認識している。 ③検証の必要性は感じているものの、導入から年数が浅く、ある程度データを蓄積している段階であるため実施には至っていない。今後、データの蓄積を得て検証を行う予定である。
(1)-4	学修成果の検証及び可視化	成績評価	GPAの活用状況	GPAはどのように分析し、活用しているか？	GPAの分布状況はアセスメント・プランにおいて、在学時の大学全体レベル、学位プログラムレベルのCP、DPの達成度の測定に用いることとしている。また、GPAとアセスメントテストの結果や休学・退学状況と掛け合わせて分析することにより、伸びる学生やつまづいてしまう学生の傾向を見出すために活用している。	政策支援IR課	①「伸びる学生やつまづいてしまう学生の傾向」として、具体的にどのようなことが明らかになっていますか。また、こうした知見は、どこでどのように活用されていますか。 ②GPAを就職活動に活かせる取組(特に優れた成績の学生について)は行っていますか。 ③活用の目的は理解しましたが、活用の効果、活用した結果学生がどのように変化したのかをご教示ください。	①GPA及びGPS-Academicの成績から、入学時と1年前期時点で休学可能性のある学生を抽出しています。これらは、教学改革推進委員会等で報告し、個別の事例は別途学部にフィードバックしています。 ②GPAは成績証明書に記載されていますが、特段の対応は行っておりません。 ③学生は毎年度、学外の客観的なアセスメントテストを受検することで、自身の成長や長所を見つける定点観測としての一面とともに、就職活動における自己分析を作成する基礎としています。
(1)-5	学修成果の検証及び可視化	卒業時点の到達状況	学位取得数	-	※FACTBOOK該当ページを提示 →別紙 TGU FACTBOOK P22-28 https://www.tohoku-gakuin.ac.jp/about/factbook/files/2022.pdf	教務課	①2010年代(学部によっては2010年代後半以降)、卒業割合が右肩上がりになっている理由・要因について、大学としてどのように解釈されていますか。 ②学部により変動はあるものの、近年修業年限内卒業率が少上昇傾向にあるように見えますが、何か特別な工夫、努力などを行っていますか？	①毎年、各学科において成績不振者への面接を学期毎に丁寧におこなってきたことが、卒業者の割合の増加に貢献しているのではないかと考えている。 ②以前と比較して、学生が早い段階から積極的に進路変更を模索するようになった可能性があるものと解釈している。
(1)-6	学修成果の検証及び可視化	卒業時点の到達状況	国家試験合格数	-	※FACTBOOK該当ページを提示 →別紙 TGU FACTBOOK P148-151 https://www.tohoku-gakuin.ac.jp/about/factbook/files/2022.pdf	(各学部長)	①現在、大学として、国家資格その他の資格取得について特に力を入れているものはどれでしょうか。また、授業以外での資格取得に対する支援策にはどのようなものがありますか。	-
(1)-6						文学部		①教育職員免許状の取得： 正課外でも、全学的に、教職課程センターおよび教務課・教職課程センター係が中心となり、教員免許状取得希望者への体系的・系統的な支援を実施している。
(1)-6						経済学部		①学部独自の授業以外での支援策は行っていない。
(1)-6						経営学部		①(経営学部) 商業簿記という科目で日商簿記検定3級と2級資格取得のための学習を取り入れている。特別講義IVでファイナンシャルプランナー3級対策、特別講義V・VIで同資格2級対策のための学習をしている。授業以外にも、会計・ファイナンス実習室を設け、簿記検定とファイナンシャルプランナー受験対策のための参考書や問題集などを貸し出し、受験対策のための学習補助をしている。また、会計・ファイナンス実習室では、日商簿記検定2級受験のための対策講座を年2回開催している。
(1)-6						法学部		①法学部では、司法試験の合格を目指して、法科大学院への進学に力から入れています。さらに、宅地建物取引士、行政書士や税理士の資格取得にも力を入れています。法学部では、独自に、資格試験対策のための課外講座、具体的には、法科大学院進学のための講座、宅建士講座、税務会計講座を開催しています。
(1)-6						教養学部		①人間科学科が特に力を入れている資格は、社会調査士、認定心理士、公認心理師である。言語文化学科のそれは、日本語教員基礎資格、各種語学検定(独語、仏語、中国語、韓国語)である。情報科学科のそれは、中学校教諭免許(数学)、高等学校教諭免許(数学、情報)である。地域構想学科のそれは、社会教育主事である。支援策について、たとえば言語文化学科は、英語免許受験者のために英語のみでランチタイムを過ごす試みを行ったり、教員がサークルやボランティア活動に積極的にコミットしている。ほか、教員免許取得のために、教職課程センターでは「教職相談窓口」を開設している。

No	分類	調査項目	観点	質問	回答	回答部署	外部評価委員からの追加質問	追加質問回答
(1)-6						地域総合学部		①現在、地域総合学部地域コミュニティ学科で取得できる資格は以下の通りである。 教育職員免許状 中学校1種：社会 高等学校1種：地理歴史 高等学校1種：公民 社会教育主事（社会教育士） 測量士補 地域調査士 GIS学術士 一方、地域総合学部政策デザイン学科で取得できる資格は以下の通りである。 教育職員免許状 中学校1種：社会 高等学校1種：公民 社会福祉主事任用資格 2023年度開設の新学期であるため、上記の資格取得の実績はまだないが、これまで旧学科の実績に基づけば、新学期においても教育職員免許状ならびに社会教育主事（社会教育士）の資格取得に注力することとなる。なお、授業以外の資格取得の支援策は特に取り組んではいない。
(1)-6						情報学部		①大学として特に力を入れているものは、本学の後援会資格取得報酬制度にリストアップしている資格となります。 https://www.tohoku-gakuin.ac.jp/campuslife/shikaku/bonus.html
(1)-6						人間科学部		①国家資格としては公認心理師が挙げられます。正確には、学部の授業を履修することで国家試験受験資格の一部が取得可能です。また、国家資格ではありませんが、保健体育の教員免許状や社会調査士、認定心理士の資格取得も人間科学部の特色として打ち出しています。なお、公認心理師のフルの受験資格を獲得するには、現実的には大学院を修了する必要がありますので、学部の教育において国家試験対策までは行っていません。また、保健体育の教員免許状に関しては、教職課程センターと連携し支援していきます。支援内容の詳細は教職課程センターに確認いただくと幸いです。社会調査士と認定心理士は、学部で所定の単位を習得すれば得られるので、授業以外の支援策というとはとくにありません。
(1)-6						国際学部		①国際学部では、登録日本語教員(2024年度から国家資格相当)を目指す課程を設置している。また各種外国語検定の受験を推奨し、受験料補助を行なっている。
(1)-7	学修成果の検証及び可視化	卒業時点の到達状況	資格取得数	-	※FACTBOOK該当ページを提示 →別紙 TGU FACTBOOK P148-151 https://www.tohoku-gakuin.ac.jp/about/factbook/files/2022.pdf	(各学部長)		- ①資格取得者数の推移について、大学の出口戦略としてどのように見えていますか。（もっと増やしていくべきなのか、あるいは別の資格が取得できるプログラムを増やすのか等） ②現在、大学として、国家資格その他の資格取得について特に力を入れているものはどれでしょうか。また、授業以外の資格取得に対しての支援策にはどのようなものがありますか。
(1)-7						文学部		①文学部では、教育職員免許状以外にも、正課として司書・学校図書館司書教諭資格、社会教育主事資格および学芸員資格の各課程を有している。ただし、これらは基本的に任用資格であるため、出口戦略と直接結びつけることはできない。別の資格が取得できるプログラムの設置は検討していない。 ②これについては、一学部長の立場で回答できるものではない。
(1)-7						経済学部		①特に意見になし。 ②学部独自の授業以外での支援策は行ってない。
(1)-7						経営学部		①（経営学部）出口戦略と言えるかどうかはわからないが、経営学部では、会計科目を多く用意しているので、その学修成果として日商簿記検定2級の資格取得増加を目指し、会計・ファイナンス実習室を設け、日商簿記検定2級受験のための対策講座を年2回開催している。また、資格取得推薦入学者に対しては、日商簿記1級対策関連科目（商業簿記Ⅲ（A）・Ⅲ（B））、税理士・公認会計士説明会、各演習担当教員による大学院への進学支援などを実施して、会計専門職人としての出口を用意している。それ以外の資格を拡充するよりは、現行の会計・ファイナンスの資格取得支援を継続的に運営していくことを考えている。 ②（経営学部）資格取得は出口戦略ならびに大学の教育内容を広く社会に訴求するための有効な方策の1つになると考えられる。他方で、資格は、あくまでも自らのポジションを実現するための手段であるとも考えている。自分の将来的なキャリア形成に必要な資格を修得するために、前述の（1）-6ならびに（1）-7①でも説明した通り会計・ファイナンスに関連した資格関連の科目および実習室・教材を用意している。また、そうした充実した科目、支援などについて、大学案内およびオープンキャンパスでも説明しており、入口戦略としても訴求している。
(1)-7						法学部		①法学部では、法系の資格取得者を増やすべきと考えています。 ②法学部では、独自に、資格試験対策のための課外講座、具体的には、法科大学院進学のための講座、宅建士講座、税務会計講座を開催しています。
(1)-7						教養学部		①教養学部は既に取得可能な資格が少なくないと思う。資格取得者数が増えて悪いことはないけれど、資格至上主義に陥らぬようにしたい。 ②人間科学科が特に力を入れている資格は、社会調査士、認定心理士、公認心理師である。言語文化学科のそれは、日本語教員基礎資格、各種語学検定（独語、仏語、中国語、韓国語）である。情報科学科のそれは、中学校教諭免許（数学）、高等学校教諭免許（数学、情報）である。地域構想学科のそれは、社会教育主事である。支援策について、たとえば言語文化学科は、英語免許受験者のために英語のみでランチタイムを過ごす試みを行ったり、教員がサークルやボランティア活動に積極的にコミットしている。ほか、教員免許取得のために、教職課程センターでは「教職相談窓口」を開設している。
(1)-7						地域総合学部		①地域総合学部は、資格取得を主たる教育目標として掲げているわけではないため、上記で挙げた資格の取得者数を増やすことは重視していない。しかしながら、社会情勢の変化に対応して、今後、学部・学科カリキュラムを通じて取得できる資格の見直しは行う予定である（例えばファイナンシャルプランニング技能士などの追加など）。 ②上記回答済み
(1)-7						情報学部		①教員免許については、本当に教員を目指す学生が取得するように指導しています。教員になるつもりがないにもかかわらず、とりえず取得しようとするなど、教育実習を引き受けてくれる高校に多大な迷惑をかけてしまうためです。 ②大学として特に力を入れているものは、本学の後援会資格取得報酬制度にリストアップしている資格となります。 https://www.tohoku-gakuin.ac.jp/campuslife/shikaku/bonus.html
(1)-7						人間科学部		①とくに公認心理師や保健体育の教員免許状に関しては、社会において必要な人材として増やしていくべきかと思えます。もちろんそのためには、こうした職業に就いた人への待遇改善も不可欠ですが。 ②これについては、（1）-6で述べた通りです。
(1)-7						国際学部		①国際学部では、登録日本語教員となるための教育は維持するが、就職先が少なく安定していないため、取得者増加には慎重である。一方で、過訳案内士の資格プログラムを構想してもよいかも知れない。 ②（1）-6と同じ回答。
(1)-8	学修成果の検証及び可視化	卒業時点の到達状況	受賞・表彰数	過去5年程度の学生の受賞・表彰数の推移を示してください	建学の精神を理解し、学業成績が特に優秀な学生を特待生又は優等生として表彰している。2019年度は特待生77名、優等生246名、2020年度は特待生79名、優等生241名、2021年度は特待生81名、優等生242名、2022年度は特待生82名、優等生242名、2023年度は特待生81名、優等生240名となっている。	学生課		①特待生、優等生の制度を学生がどのように受け止めているかという調査はありますか。学生たちの学修推進のモチベーションになっているのか、もしくは、不公平感を抱いているのか。あるいは、あまり、積極的に広報していないのか、など。 ③調査はしていない。制度についての広報は、大学ホームページの在学生向けのページ、Pocket TGU（電子版学生手帳）で内容を掲載し、毎年、表彰式の内容を新着情報としてホームページに掲載している。
(1)-9	学修成果の検証及び可視化	卒業時点の到達状況	進学率・就職率	-	大学ホームページ（就職データ）参照 https://www.tohoku-gakuin.ac.jp/career/data/06.html	就職キャリア支援課		①就職キャリア支援部では、「就業安定法第33条の2 [学校の行う無料職業紹介事業]」に基づき、就職を希望する学生が望んでいる職業に全員残らず就職できることを目標に、様々な就職キャリア支援を行っている。よって基本的には、就職希望者に向けた支援を実施しているが、本学での就職・進学以外の学生は、留学、起業、アルバイト継続など上げられる。フォローについては、相談があれば対応し、より詳しい部署や機関を紹介。また、社会に出る前の4年生には、労働条件の基礎知識やメンタルヘルズ講座を開講している。
(1)-10	学修成果の検証及び可視化	出口保証の仕組み	ディプロマポリシー（卒業認定・学位授与の方針）を総合的・客観的に評価する科目（卒業論文/研究、ゼミ等）の設定と評価	学位授与の方針を総合的・客観的に評価する科目（卒業論文/研究、ゼミ等）は、全ての学位において設定しているか？またその評価はどのように行われているか？	東北学院大学「教育学上の3つの方針」に対する評価の方針（アセスメント・ポリシー）」に基づき、内部質保証委員会で承認された評価指標に沿って、在学時や卒業後に区分してD Pに関する教育学上の成果を測定することとしている。しかしながら、卒業論文やゼミ等の設定についてはすべての学部で設定しているわけではない。	教務課		①ルーブリックの導入についてその有効性等を学内で共有し、段階的に導入しているところである。今後全学での実施に向けて対象範囲をさらに拡大していきたいと考えている。 ②複数の教員による評価がなされることで、評価そのものがより客観的なものになると認識しており、今後より多くの学科において導入されるように全学的な議論を進めていきたいと考えている。

No	分類	調査項目	観点	質問	回答	回答部署	外部評価委員からの追加質問	追加質問回答
(1)-10					文学部では、英文学科、総合人文学科、歴史学科および教育学科の前4学科において、学位授与の方針を総合的・客観的に評価する科目（卒業論文、ゼミ（各種「演習」科目））を設定している。このうち、ゼミ（各種「演習」科目）は4学科で必修としており、卒業論文も総合人文・歴史・教育の3学科においては必修である。英文学科では、卒業論文と卒業試験とを選択必修とする教育課程をとっている。卒業論文の評価であるが、ゼミ（各種「演習」科目）の延長かつ総まとめの科目として、基本的には各担当教員の責任の範囲で、学位授与の方針に照らしながら総合的・客観的に評価している。なお、総合人文学科では、卒業論文の指導に複数の教員が関わる指導体制をとっている。また、英文学科で導入している卒業試験は、当該学科の専門教育科目を重層的に網羅する内容となっている。このため、英文学科の卒業試験も、学位授与の方針に基づいた総合的かつ客観的な評価がなされていると言える。	文学部	①卒業論文、卒業試験について、客観的評価がどのような仕組みによって可能となっているのか、具体的にご教示ください。 ②総合人文学科について、年度によって就職率がやや低い（数名就職できていない）傾向があるようですが、このことについて学際あるいは学部としてどのように認識されていますか。	①卒業論文においては、各学科の教育課程、およびそれらの学修によって実現されるべき学位授与の方針に精通した専任教員が指導に当たっている。専任教員は、卒業論文がゼミ（各種「演習」科目）の延長かつ学科教育課程の総まとめの科目であることの意味と重要性に鑑み、その責任の範囲で評価を行っている。これにより、一定程度以上の総合的・客観的な評価がなされていると認識している。 ②教育学科を除く文学部3学科でなされる学修は、基本的には数千年の歴史を持つリベラル・アーツの系譜にあり、特定の職業実践に直結するものではない。もちろん、大学の学部・学科の社会的な使命として、そうした学識を有した学生が就職を希望した場合、それを支援する義務は当然にある。そうして就業した卒業生たちには、いまでは珍しくなったりリベラル・アーツの深い学修により身に付いたもの見方・考え方を武器に、実社会において活躍する者も少なくないが事実である。ただし、そのいっぽうで、みずからの知的欲求に誠実にしたが、文学部各学科において学修することに代替不可能な意味と価値を見出している学生たちも少なからずいる。文学部としては、こうした学生たちにも、門戸を広く開いているつもりである。
(1)-10					経済学部では経済学科、共生社会経済学科ともに、学位授与の方針を総合的・客観的に評価する科目として2～4年次に「演習」（ゼミ）を開講している。また経済学部では2023年度入学生から卒業時の学修成果の総合的な評価を行うため4年次に「卒業研究・卒業試験」を新しく開講し、卒業研究（卒業論文）、卒業試験のいずれかを選択必修とする教育課程の見直しを行った。これら演習科目の評価については演習科目の担当者がそれぞれ達成目標に基づいて行っている。	経済学部	①2～4年次の「演習」について、学部として共通の評価基準等を定めていれば、ご教示ください。	①学部として共通の評価基準は定めていない。経済学部の「演習」を担当している教員の専門分野は理論、実証、政策、歴史等多岐にわたっており、学部で共通の評価基準を定めることは困難である。
(1)-10					経営学部では、学位授与の方針に従って学位を授与している。学位授与の方針を総合的・客観的に評価する科目である「演習」（いわゆるゼミ）は3年次と4年次で開講し、経営学を構成するマネジメント、マーケティング、会計・ファイナンスの3つ専門分野からゼミを選択できるようにしている。ただし、ゼミは必修ではないため、ゼミの受講率は70%程度である。各ゼミではその専門分野に基づいて、3年次には、専門分野の理解と調査活動を行い、その成果をプレゼンテーションやレポート作成などで発表している。4年次にはゼミおよび大学4年間の学修の集大成として卒業論文や卒業研究を行っている。このように各ゼミでは、調査活動や卒業論文作成などを通して、その学修成果を学位授与の方針と照らし合わせて評価している。	経営学部	①「演習」（ゼミ）を受講していない約30%の学生について、何をもち、学授与方針に合った学位授与となっていると見なしているのか、ご教示ください。 ②ゼミが必修化されていない理由を教えてください。 ③学位授与の方針を総合的・客観的に評価する科目として「演習」を位置付けていますが、それが必修ではなく7割程度の受講となっています。残りの学生は、総合的・客観的に評価できる科目を受講していないにもかかわらず、卒業認定しているとすれば、どのような判断に基づいているのかを知りたいです。	①経営学部の3、4年次の演習では、各教員の専門的な分野に特化した学修になるが、経営学部のカリキュラムにおいて、マネジメント、マーケティング、会計・ファイナンスという経営学を構成する3つの専門分野から理論をバランスよく学修することができ、またビジネス・ケース実習、旅行プラン作成、おもてなしの経営学など理論を実践的に応用できる実践系科目も学修できるようになっている。実践系科目では、企業や地域の課題に対して、それら課題を解決するための計画や戦略の立案し経営者に提案するというアクティブ・ラーニング方式を採用しており、ゼミと同様の専門知識の実践的活用ならびに調査活動や成果発表などを学修できる。したがって、演習を受講しない場合でも、学位授与の方針にある経営学部での学修成果を実現するための幅広い機会と科目選択の多様性を学生に与えられていると考えられる。 ②学生が自ら選択し履修したゼミや研究内容とのミスマッチによる学生の学修意欲の低下や精神的苦痛など、必修化に伴うデメリットについて配慮している。教育現場における切実な問題として、一教員がゼミで教育できる人数には限界があり、現状の教員数と学生数の比率を考えれば、全ての学生が第1希望のゼミに入れるわけではないので、上述のようなミスマッチが発生するという事態は避けられない。実際には、第3希望、第4希望のゼミにしか入れない学生もいる。そのようなミスマッチがある状態で学修や研究を無理に続けることは、学生に過度な精神的負担を強いることになる。また、限られた教員数の中で、希望する学生を全て指導することを無理であり、各教員にそれを無理に強制すれば、教員への過度な労働強化や精神的負担につながる。経営学部のような限られた教員数で多くの学生を指導しなければならない状態において、ゼミを必修化した場合には、上述のようなミスマッチに起因する学生の学修意欲の低下と精神的負担という問題が発生する可能性があると考えている。演習を履修しなくとも、上述①で説明したように経営学部独自の実践系科目などその他の多様な学修機会を学生に提供することで学位授与の方針を充足できると考えられる。さらに、ゼミを含めて多様な学修機会の中から学生自ら履修科目を選択させることによって、経営者や企業人に必要な主体性や判断力を培うことも意図している。自らのビジョンやキャリアの実現に必要な科目や学びの機会を主体的に選択することも、学生が学生時代に経験すべき重要な行動の1つになり、人間性ならびに責任感を養うことにもつながると考えている。大学案内の履修計画の考え方の中でも、上述のような経営学部の考え方を明記している。 ③演習による各指導教員の指導と評価に加えて、経営学部のカリキュラムは、企業経営に不可欠な知識を網羅するマネジメント、マーケティング、会計・ファイナンスの3つの領域から編成されており、卒業単位数を全て修得するためには、それら3つの領域の科目や実践系科目をバランスよく履修しなくてはならない。このことから、卒業単位を修得することが、経営学における総合的な学びを評価することに繋がると考えられる。演習については上述の①②のような理由により必修化されていない。ただし、新カリキュラムでは、1年次から演習科目を用意することでいずれかの学年で希望のゼミに所属できる可能性を高めつつ、卒業試験という科目を新設し、総合的な学びをより客観的に評価する仕組みを整えている。
(1)-10					法学部法律学科では、学位授与の方針を総合的・客観的に評価する科目として、2017年度以降入学生については、「演習二部」と「卒業試験」を選択必修としている。2023年度以降入学生については、「演習二部（卒業研究・論文）」を必修としている。「卒業試験」については、50問・択一式で合格点（30問以上の正答）を取ることにより、単位修得を認め、学修成果を総合的に確認している。「演習二部」に関しては、担当教員がシラバスに成績評価方法・基準を明記し、その基準に従い成績評価することにより、学修成果を総合的に確認している。	法学部	①2017年度以降入学生が選択している「演習二部」の成績評価・基準について、どのように学位授与の方針との関係性を担保しているのか、そのための仕組みがあればご教示ください。 ②2023年度以降の入学生について、卒業研究・卒業論文を必修とした理由は内部質保証委員会承認された評価指標（アセスメント・プラン）に沿うことを意図したのでしょうか。	①法学部では、学位授与の方針との関係性を担保するために、「演習二部」の成績評価をルーブリックに基づいて行うように取り決めをしています。しかし、現状では、担当教員一同に浸透しているとはいえない状況にあります。 ②卒業時の質保証のために、2023年度入学生以前は、演習二部と卒業試験を選択必修としました。しかし、4年次に、卒業試験を選択し、演習二部を履修登録しない4年生が一定数存在しています。そこで、2023年度以降の入学生については、卒業試験を廃止し、演習二部（卒業研究・論文）を必修とすることにより、演習担当の教員が、4年生に対して、就職や卒業に向けての単位修得についてサポートできるように仕組みを改めました。
(1)-10	学修成果の検証及び可視化	出口質保証の仕組み	ディプロマポリシー（卒業認定・学位授与の方針）を総合的・客観的に評価する科目（卒業論文/研究、ゼミ等）の設定と評価	学位授与の方針を総合的・客観的に評価する科目（卒業論文/研究、ゼミ等）は、全ての学位において設定しているか？またその評価はどのように行われているか？	未回答	工学部	今回の委員会に間に合うようにご回答ください。	工学部は、学位授与の方針の成果を総合的に評価する科目として、4年次に「卒業研究Ⅰ・Ⅱ」を必修科目としている。卒業研究Ⅰを通して、各研究テーマで行う研究の内容を理解し、卒業研究Ⅱでは最先端の研究を体験し、自身が行った調査・研究内容を発表するものである。またその評価は、ルーブリックによる評価基準を設け、講義の中で学生に示している。
(1)-10					教養学部は「演習A・B」（3年次）及び「総合研究（卒業課題）A・B」（4年次）を必修科目としている。学生は4学科の枠を越えたチームテーマに分かれ、指導教員の下、自ら課題を設定し、自ら解決を模索する。総研卒論の提出後はチーム毎に試問会の開催を義務づけ、成績評価にはルーブリックを用いている。また、教養学部優秀卒論選考委員会を設置し、全論文から優秀論文賞・学科長賞・学部長賞を選出表彰し、出身高校長宛に報告書も送付している。なお、コロナ禍で中断はあったものの、例年2～3月に教養学部フォーラム「教養学部の学びを知る」と題して、優秀卒業論文・卒業研究の発表会を学内外に公開している。	教養学部	-	-
(1)-10					地域総合学部地域コミュニティ学科では、全学共通の学修成果の他に4つの学修成果を示している。これらは特に3年次開講の「地域コミュニティ学演習Ⅰ・Ⅱ」と4年次開講の「総合研究Ⅰ・Ⅱ」（いずれも必修科目）において、演習課題や卒業論文に基づいた総合的・客観的な評価を行う。一方、地域総合学部政策デザイン学科でも4つの学修成果を示し、4年次開講の「卒業研究」（必修科目）において、卒業論文に基づいた総合的・客観的な評価を行う。なお、これらの評価については評価の公正性を担保するため、複数教員によるクロス評価を行う。	地域総合学部	①複数教員によるクロス評価について、共通の評価基準等を定めていれば、ご教示ください。	①現在の1年生が卒業研究に取り組む2026年度までに、複数教員によるクロス評価体制の構築や共通の評価基準を策定する予定である。また、その内容は2025年度中に学生に周知する。
(1)-10					情報学部の学位授与の方針に基づき、教育課程の編成・実施の方針10項目を定めている。この方針に含まれる科目群は、教養教育科目、外国語科目、保健体育科目、専門基礎科目、専門科目から構成されている。成績評価方法と成績評価基準については、シラバスに明示しており、指定試験、レポート、授業中の小テスト・課題等に基づいて科目担当教員が評価を行う。卒業判定、学位授与については、「学則」での規程に従い、修得単位数をもとに卒業判定資料を作成し、「学則」に則って情報学部教授会において審議し、最終的に学長が決定する。	情報学部	①情報学部では、学位授与を授業科目の成績評価・修得単位数のみで行い、卒業論文・卒業試験は導入していないということでしょうか。	①専門基礎科目のなかに総合研究（卒研課題）Aおよび総合研究（卒研課題）Bがあり、成績評価方法は各教員がシラバスに明記しますが、研究内容の論文や開発システムについての口頭発表に基づいて、ルーブリック評価基準を設けて総合的・客観的に評価を行う予定です。
(1)-10					国際学部では、学位授与の方針の成果を総合的に評価する科目として、「国際学演習Ⅰ」「国際学演習Ⅱ」「卒業演習Ⅰ」「卒業演習Ⅱ」を必修科目として設定している。複数ある演習の中から1つを選んで専門性を深める学びを3年次に開始し、4年次に研究課題を設定して取り組む。成績評価方法は各教員がシラバスに明記するが、「卒業演習Ⅱ」の研究成果は論文や口頭発表等の形態で公開され、学科内で設ける予定の基準に従って評価される。	国際学部	-	-

No	分類	調査項目	観点	質問	回答	回答部署	外部評価委員からの追加質問	追加質問回答
(1)-10					人間科学部では、4年次に「卒業研究A」および「卒業研究B」を必修科目として設定している。またその評価は、教養学部人間科学科におけるそれと同様、卒業研究ルーブリック評価基準を設け、それにしたがって行う予定である。	人間科学部	-	-
(1)-11	学修成果の検証及び可視化	学生調査（直接評価）	アセスメント・テストの実施と結果の活用状況	アセスメント・テストはどのように行われているか？またその結果をどのように分析し、活用しているか？	アセスメントテストは、ベネッセ・キャリア社の「GPS-Academic」を利用している。これは、本学のDPにも対応する項目が測定可能であるため当該テストを選定した。 ②アセスメントテストの受験率はどうか。結果のフィードバックや教学改革推進委員会への報告により、改善傾向は見られますか。 ③アセスメントテストの結果について、学生たちはその後の学修にどのように活かしているか、確認していますか？結果から、大学としての施策に活かしているものもありますか？ ④アセスメントテスト（GPS-Academic）の結果を大学として活用する具体的な手法、事例を教えてください。（テストのスコアを「平均」した場合にどのようにその傾向を読み取れ、それをどのように学修支援（個々の授業）に反映させていくのか）	政策支援IR課	①フォローガイダンスは、誰がどれくらいの頻度で実施していますか。また、フォローガイダンスはすべての学生に対して実施されていますか。 ②アセスメントテストの受験率はどうか。結果のフィードバックや教学改革推進委員会への報告により、改善傾向は見られますか。 ③アセスメントテストの結果について、学生たちはその後の学修にどのように活かしているか、確認していますか？結果から、大学としての施策に活かしているものもありますか？ ④アセスメントテスト（GPS-Academic）の結果を大学として活用する具体的な手法、事例を教えてください。（テストのスコアを「平均」した場合にどのようにその傾向を読み取れ、それをどのように学修支援（個々の授業）に反映させていくのか）	①フォローガイダンスは、アセスメント・テストを受検した学生を対象に実施しています（結果レポートを用いるため未受検者は対象外）。ガイダンスは学年別にテスト実施期間後にオンラインで各1～2回設定しています。ただし、参加率は10～300名程度と学年により差があります。 ②受検率は、1年生97%（2023年度）、3年生54%、4年生23%（2022年度）でした。受検率については実施期間中に学部長会で教員から学生への呼びかけを依頼したり、3年生の場合は就職キャリア支援課から通知するなどしていますが、受検率の大幅な改善とはなっていません。2024年度から、後期開始前にオリエンテーションの場を設け、未受検者の一斉受検を行うなどの対応を検討しています。 ③④学生によるアセスメント・テストの結果の活用については確認できておりません。大学としての施策の活用については、具体的な事例はまだありませんが、経年データが蓄積していることから1年次から3年次へのアセスメント・テスト成績の伸長を分析しており、今後の施策に活かすことを検討しています。
(1)-12	学修成果の検証及び可視化	学生調査（間接評価）	入学生意識調査の実施・活用状況	入学生意識調査はどのように行われているか？またその結果をどのように分析し、活用しているか？	入学生意識調査は、教育総合研究所が新入生オリエンテーション期間にオンライン（LMS）で実施している（回答率は95%超）。設問内容は、本学に入学した理由や、高校生活について、大学で力を入れたいこと等のほか、学科別の設問から構成されている。結果は、政策支援IR課・教育総合研究所で集計し、経年変化やAP、DPの理解度等をまとめ、教学改革推進委員会や部長会で報告するとともに、大学ホームページで公開している。また、2023年度は新学部の学生を対象に実施した新学部開設記念イベントにおいて、調査結果の概要を学長室から報告し、新学部の新入生の特徴を説明し、大学生活を有意義なものとするよう伝えた。	政策支援IR課・教育総合研究所	①入学生意識調査について、記述されている以外の活用事例があればご教示ください。 ②入学生意識調査と卒業生意識調査とを連関させて分析するような工夫はなされているか教えてください。 ③何を目的に実施しているのかが不明瞭です。調査自体が目的になっていて、あまり活用されているとは思えません。	①現在のところ、回答以外の活用事例はありません。今後、入試データやアセスメント・テスト結果、GPA等と組み合わせて分析することなどが考えられます。 ②特に行っていません。 ③本調査は、新入生の特徴やAPの理解度などを把握し、新入生への教育・指導および入学募集のための基礎資料とすることを目的として実施しています。
(1)-13	学修成果の検証及び可視化	学生調査（間接評価）	卒業生意識調査の実施・活用状況	卒業生意識調査はどのように行われているか？またその結果をどのように分析し、活用しているか？	卒業生意識調査は、教育総合研究所が卒業予定者を対象にオンライン（LMS）で実施している。設問内容は、大学で身につけたこと等DPに関するもののほか、学科別の設問から構成されている。なお、オンラインでの回答率は半数程度のため、未回答者は卒業式当日にアンケート用紙にて回収している。結果は、政策支援IR課・教育総合研究所で集計し、経年変化やDP、CPIに対する評価等をまとめ、教学改革推進委員会や部長会で報告するとともに、大学ホームページで公開している。	政策支援IR課・教育総合研究所	①卒業生意識調査について、近年の回答率をご教示ください。 ②大学として、卒業生意識調査の結果からどのような課題感を有していますか。教学改革推進委員会等での議論を踏まえてご教示ください。 ③卒業生意識調査結果に基づいて改善が図られた事例があればご教示ください。 ④入学時に意識していたことが、学生生活を経てどのように変化したのかを明確に把握できる仕組みになっていますか。 ⑤調査結果の反映の具体例を教えてください。 ⑥何を目的に実施しているのかが不明瞭です。調査自体が目的になっていて、あまり活用されているとは思えません。	①過去3年の回答率92.4%（2022年）、91.7%（2021年）、85.2%（2020年）です。 ②大学に対する総合的な満足度は高い傾向にあるのは事実ですが、コロナ禍前と比べて低下傾向にあるため、キャンパスミニストリー（大学生生活における様々なキリスト教的活動）の経験を授業外でも多く持つことが必要であると考えています。 ③卒業生満足度のみならず、学修成果に関する満足度を測定・評価し公表するように提言をしています。 ④調査の目的が異なることから、卒業生意識調査と新入生意識調査の設問が対応していないため、意識の変化を正確に捉えることはできていません。 ⑤大学が「学位授与の方針」「教育課程編成・実施の方針」等として掲げている目標に沿った教育が実現しているか否かを点検し、今後のカリキュラム改善や教育内容・方法の見直しに資する情報を得ることを目的として実施しています。
(1)-14	学修成果の検証及び可視化	学生調査（間接評価）	卒業生アンケートの実施・活用状況	卒業生アンケートはどのように行われているか？またその結果をどのように分析し、活用しているか？	卒業生アンケートは、就職キャリア支援課が主管し、卒業後3年を経過した卒業生を対象に、オンラインで実施している。依頼方法は、校友会から入手した卒業生の住所宛に、郵送で調査回答URLを送る形としている。回答率（概ね6%）が低いことが課題となっており、来年度以降は卒業時に収集されたメールアドレスに依頼することを検討している。アンケートの設問は大学で身につけたこと、東北学院大学のイメージ、現在の職業、後輩への就職活動アドバイス等から構成されている。結果は、政策支援IR課が集計し、経年変化やDPの評価等をまとめ、教学改革推進委員会や部長会で報告するとともに、大学ホームページで公開している。（政策支援IR課） また、アンケート内容には、在学生への就職活動支援にご協力いただける卒業生を募集し、登録いただいた卒業生へには、在学生を対象としたイベントや刊行物などにご協力をお願いする制度を設けている。（就職キャリア支援課）	政策支援IR課・就職キャリア支援課	①卒業生アンケートの実施頻度についてご教示ください。 ②同アンケートの結果を通して明らかになった課題があればご教示ください。 ③卒業生に意識していることが、3年間の社会生活を経てどのように変化したのかを明確に把握できる仕組みになっているのでしょうか。 ④卒業後3年の結果は重要だと思いますが、卒業生にとっては、社会の荒波の中で、今を生きること必死な時期だと思います。どこが大学でも大変だと思いますが、今後の方策について、記載されている方策以外の検討中内容があればご教示ください。 ⑤調査自体が目的になると、回答率の低さを課題として認識されず、改善もなされない。学生がどのような思いを持って入学し、自己分析したのちに、授業やその他の活動等で身につけた資質や能力をもとに、どのように考え、進路を実現したのか。身につけようと考えた資質や能力は果たして身につけたのか。どこに課題があるのか。4年間をすごした学生の意見をもっと大切に、調査結果を分析し、改善に生かすべきではないでしょうか。	<政策支援IR課> ①卒業生アンケートは、1年に一度、卒業後3年経過後の学生を対象に実施しています（2022年度は2018年度卒業生が対象）。 ②回答率が極めて低いことから、同意意と実施方法について検討する必要がある。回答における課題は、「東北学院大学のキリスト教教育が現在の生活につながっていると感じますか」との設問におけるポジティブな回答が少ない。卒業後に人間的な涵養を経て得られるものであり、卒業後3年程度では実感しにくい。 ③本調査は、大学3年生向けに資料として提供しており、卒業生の率直な声を学生に届けることで就職活動をしている学生が進路・就職先を選択する上で役立つことと示している。 ④大学を卒業して3年となる時期は、大学生活を振り返り進路・就職における自己を振り返る機会として位置付けている。今後、同意意も可能な限り連携し、5年後、10年後の卒業生調査を実施できないか検討をしたい。 ⑤ご意見ありがとうございます。入学時から在学中、卒業時、卒業後までを追跡した分析が必要と認識しました。今後のIRの取り組みに活かしたいと存じます。
(1)-15	学修成果の検証及び可視化	学生調査（間接評価）	卒業生進路・就職先への学修成果調査の実施・活用状況	卒業生進路・就職先への学修成果調査はどのように行われているか？またその結果をどのように分析し、活用しているか？	卒業生進路・就職先への学修成果調査は、就職キャリア支援課が主管し、本学の学生の採用実績のある企業・自治体等へ依頼している。郵送で依頼書を送付し、オンラインで回答してもらう形式となっている。設問は、東北学院大学卒業生の学修成果について、学生に備えてほしい知識・能力、東北学院大学からの採用実績等から構成されている。結果は、政策支援IR課が集計し、DPの達成度の評価等をまとめ、教学改革推進委員会や部長会で報告するとともに、大学ホームページで公開している。（政策支援IR課） また、調査時に、本学学生への、求人票及びインターンシップの申込について企業へご案内している。（就職キャリア支援課）	政策支援IR課・就職キャリア支援課	①進路・就職先への学修成果調査の実施頻度についてご教示ください。 ②同学修成果調査の結果を通して明らかになった課題があればご教示ください。 ③本調査は他者評価であり、外部から見た大学の評価を表すものですが、その結果を委員会や部長会報告、HPでの公開以外に活用していますか。 ④調査結果の反映の具体例を教えてください。	①進路・就職先調査は、1年に一度、過去5年間で2名以上採用された企業及び機関を対象に実施しています。 ②キリスト教教育による個人の尊厳と人格の尊重とあった建学の精神の理解浸透は、大学卒業時点で実感を覚える機会があるものではなく、卒業後の人生において得られる人間的基礎となります。この評価について、卒業時においてどのような実感が得られるのか、測定・評価の方法を考える必要があると考えています。 ③進路・就職先から見た東北学院大学に期待することとして、学生に対しても結果の公開を行っています。 ④教学改革推進委員会における報告と、進路・就職先から得られる本学の教育に対する意見・要望で改善事項がある場合には、学長より改善の指示が行われることとなりますが、これまで指示まで実施された例はありません。
(1)-16	学修成果の検証及び可視化	教学に関する懇話会	開催頻度、聴き取り内容、結果の活用状況	教学に関する懇話会はどのように実施されており、その結果をどのように活用しているか？	教学に関する懇話会は、年に一度、東北学院大学の教学に関する懇話会設置要綱にもとづき開催している。委員は学識経験者、地方自治体、産業界、市民団体等、本学に関わりのある方と、さらに学生代表として学生会常任委員会の委員長・副委員長としている。懇話会では、教学上の三つの方針に関係するテーマおよび東北学院大学の最近の状況に関して自由に意見を述べていただき、懇談を行う形式としている。収集した意見については、教学改革推進委員会において報告し、意見交換を行っている。最近では、カリキュラム改正にあたって、懇話会でヒアリングした「他学部学生と一緒に学びたい」との意見を参考にして課題探求の科目を設定するなど、懇話会の結果を活用している。	政策支援IR課	①忌憚なく意見を述べてもらう工夫はしていますか。	①懇話会では、慣例として座長を副学長（学務担当）として進行している。大学からテーマとしていくつかの項目を提示し、座長が参加者に発言を促す形となっているが、参加者が本学と関わりのある方々であることから、特に工夫をしなくても忌憚のない意見（褒めるだけでなく、本学への要望などについても）をいただける。
(1)-17	学修成果の検証及び可視化	学生協議会	開催頻度、聴き取り内容、結果の活用状況	学生協議会はどのように実施されており、その結果をどのように活用しているか？	本学では、学生からの要望を聞き協議する場として、合同協議会を年に1回開催している。合同協議会には、大学側から学長以下、代表教職員が出席し、学生総会などで決定された要望などについて、学生会から直接大学に伝え協議する場となっている。合同協議会後に大学として要望事項を関係部署で検討し、学内施設、備品等の整備、施設利用に係る問題などを改善している。	学生課	①学生協議会を通して得られた要望に基づく改善事項について、どのように学生にフィードバックしていますか。 ②状況変化が著しい現代社会において、年1回の合同協議会で要望事項を的確に聴取し、対応していくことは可能でしょうか。	①合同協議会での改善事項のフィードバックは、常任委員会を通じて内容を確認し状況報告している。 ②合同協議会は年一回開催ではあるが、学生課においてその都度情報共有し、他部署へも相談しながら時代の変化に適切に対応している。
(2)-1	eポートフォリオの活用	システムの概要	入力項目、インターフェイス	eポートフォリオにはどのような入力項目があるか？また学生、教職員はどのように入力を行う仕組みとなっているか？	「目標と振り返り」「マイワーク」「免許・資格」「課外・ボランティア」「進路・就職活動」「留学」等の項目がある。目標や振り返りは、オリエンテーション期間及び成績発表時に入力、その他は随時入力。別紙「入カスケジュール」及び「TG-folio 学生用マニュアル」参照。	学修支援課	①eポートフォリオは、就職活動、就職対策という場面でのどのような位置付けにあるのでしょうか。	①就職活動の際、自身の大学での学びを振り返り、どのような成長ができたのか、その結果、どのような志望動機につながったのかを説明することが求められる。eポートフォリオはこうした大学生の長期的な学びの履歴を可視化することで、自己認識を深める際に役立つと考えられる。また、自分で取得した資格等を記載する欄もあるため、正課の学習以外でも主体的に学ぶ動機づけになる面がある。eポートフォリオでは、これらの蓄積した学修成果を要約したディプロマサブリメント（学位記に付属する説明資料）として出力することができる。就職活動の際に提出を求められることが予想される。
(2)-2	eポートフォリオの活用	利用率	学生による入力率・アクセス頻度	eポートフォリオへの学生による入力率やアクセス頻度はどのようにになっているか？	学生による入力は前後期の学期はじめに行っている。入力率は別紙「目標設定状況」参照。	学修支援課	①入力率についてはどのように考えていますか？さらに上げていく方策については検討しているのでしょうか？ ②入力率が学部によって大きく差がある理由を教えてください。	①学生への周知について適宜各学科教員に協力を依頼しているほか、振り返りや目標設定の仕方を含むeポートフォリオの使い方をサポートする学生向けイベントをラーニング・commonsにおいて開催している。次年度以降は学事歴上でも指導する機会を明確に位置付けることで、全員が入力できるよう支援していく。また、未入力の学生と学修状況の関連を分析し、指導・支援が必要な学生を発見する手段としての活用も考えられる。 ②学科ごとに在籍する学生数が大きく異なるため、運用方針についても学科個別に決めている。その結果、指導する機会を十分確保できた学科とそうでない学科が生じたと考えられる。次年度以降は①で示した通り、全学で指導機会を確保すること、本年度の各学科の取り組みからグッドプラクティスを抽出するなどして、より多くの学生を支援できるように努めていく。
(3)-1	学修支援・研究指導に関する取組	学修支援体制	グループ主任制度	グループ主任制度はどのような制度で、学修支援にはどのように活用されているか	本学教員が、教育者、研究者という立場でグループ主任を担当し、学問、人生、社会、宗教等の諸問題について、学生との語りを通して学生の人間形成に良い刺激を与え、学生が安心して勉学に励めるような環境作りを行っている。新入生オリエンテーションをはじめ、あらゆる機会を通して学生の相談に応じながら、学生個々人の特性を知り、適切な指導を行い学生に対応することを依頼している。学修支援としては、主に1、2年次の履修指導を行っており、学生にとって、身近な良きアドバイザーとして事例に応じた適切なアドバイスをお願いしている。	学生課	①グループ主任を担当する教員の数、職位や年齢層についてご教示ください。 ②グループ主任制度が必要な理由は何ですか。左記の回答内容であれば、全ての教員に求められるものであると考えます。 ③グループ主任の選任方法や就任後の資質向上など質の確保はどのように行われているか教えてください。	①各学科の各学年各グループ毎に自学科の教員を1名を配置している。2023年度は1年生50名、2年生47名、3年生47名、4年生47名、総数191名。職位、年齢層については定まっていない。 ②追加質問のご指摘はその通りではあるが、現実として各教員は各自の教育・研究の実施に優先的であり、グループ主任の役割は特に担当していただく教員に求められることと理解していただきた。また学科から学生への連絡や学生からの相談の一次窓口としての役割を担っていて、学生に対して所属学科における対応者まずは入学時に明確にしている。 ③グループ主任の選定は各学部（学部長）に依頼して、各学科から選出される。グループ主任委嘱状交付式の時にグループ主任会議を学生部主管で開催し、グループ主任としての役割を伝える。

No	分類	調査項目	観点	質問	回答	回答部署	外部評価委員からの追加質問	追加質問回答
(3)-2	学修支援・研究指導に関する取組	学修支援体制	アカデミック・アドバイジング、学修支援のための仕組み(学習相談、初年次教育、リメディアル教育、ピアサポート)	履修相談や学修支援等、具体的にどのような支援を学生に行っているか？	ラーニング・コモンズの「アカデミックサポートデスク」で、学習相談対応をしている。具体的には、①ライティングに関すること(卒論・レポート・プレゼン資料・レジュメなど)、②勉強方法に関すること、③PCの使い方、④TG-folio (ポートフォリオ)に関する相談、⑤勉強のすすめ方などについて、学生スタッフと担当教員で対応している。	学修支援課	①学生に対して履修に関するアドバイスは、どのような形態で実施されていますか。 ②学生の利用頻度はどの程度でしょうか。多くの学生が、幅広く利用しているのでしょうか。特定の学生が繰り返し利用しているのか？発達障害傾向のある学生への対応はどのようにしているのか、ご教示ください。	①単位についての履修指導は教務課が対応しており、履修登録に関する情報提供として、各学部別の「履修支援サイト」を公開して、履修登録に関する情報を一元化している。さらに、「授業受講要項(学生向け)」や「学生のための遠隔授業受講ガイド」も公開している。これらを内容に基づく履修相談を、土橋・五橋キャンパス教務課(学部係)の職員が対面にて窓口対応を行っている。 ②2023年度の4月・5月の集計で回答する。2ヵ月で一人当たりの平均入室回数は2.37回。学部によってばらつきがあり、平均回数が多いのは国際学部、情報学部、教養学部となっている。4月・5月に1回でも利用したことがある学生の割合は土橋で22.6%、五橋で29.78%となっており、五橋・土橋ともに7割以上の学生がまだ一度もラーニング・コモンズを利用したことがない状況であった。繰り返し利用する学生が多い。発達障害傾向の学生については把握していないため、他の学生と同様の対応をしている。
(3)-3	学修支援・研究指導に関する取組	eポートフォリオ活用度合い	学習支援、履修指導、研究指導、学生との面談における活用状況	eポートフォリオは、学生への学修支援にどのように活用している(活用する予定)か？	学生は学期はじめにTG-folio上で目標設定を行い教職員がフィードバックを行っている。同様に、学生は学期末に自身が立てた目標に対して振り返りを行い教職員がフィードバックを行っている。また、学修成果を図示することにより自身の強みや弱みが一目でわかる仕様となっている。課外活動やボランティア、留学など正課以外の情報もまとめられており、学生生活全般の振り返りにも活用する。なお、学部学科毎に運用方針を定めており学科専門科目等で友人と意見交換をする場を設けている学科もある。	学修支援課	①TG-folioのフィードバックについて、どのような学生単位(一人当たりの担当学生数や専攻等)に対して教職員を割り当てているのか、ご教示ください。 ②TG-folioの効果について、大学(あるいは、学部・学科)としてどのように認識されていますか。 ③学生の就職支援には、どのように活用していますか。 ④eポートフォリオを活用して学修支援につなげた具体例をお示しください。 ⑤活用頻度が高い上位層の学生には、能力等を身につける上でどの点が使いやすいのか。一方、数が一番多いと思われる中間層の学生にとって、どの点において使い勝手が悪いのかを知りたいです。	①学科毎に対応しているため、教員一人当たりの担当学生数等も学科毎に異なる。 ②今年度運用を開始したばかりのため、数値で示せるような効果があるわけではない。学生は1年生の前期では9割程度の学生が目標設定を行うことができていた。また、教員からは学生個別の状況を把握しやすくなったといった声がある。 ③ディプロマサブリメントを出力できるようにしているため、4年生が就職活動の際にディプロマサブリメントをみて自身を振り返ったり、就職活動に使える可能性があるが事例として把握はできていない。 ④eポートフォリオ上では目標設定、振り返りに関する相談を書ける欄があり、書き込み状況をみて教務課、学生課、就職キャリア支援課、国際交流センターなど適切な部署に連絡できる体制を整えている。 ⑤学修成果がグラフで可視化されたり、半期ごとに目標設定・振り返りを入力できるため、自身の学びを振り返り、新たな目標を考えるなど、自己調整するためのツールとして活用できる。中間層の学生にとって、目標設定や振り返りを自分で考える習慣がない場合、効果的な使い方がわからない可能性がある。ガイダンス資料の配布、入力のコツを指導する機会を設けるなどして対応している。

【参考資料】

① 2023 年度東北学院大学外部評価委員会 名簿

任期：2022 年 4 月 1 日～2024 年 3 月 31 日

No.	所属	氏名	根拠規程
1 委員長	東北大学高度教養教育・学生支援 機構教育評価分析センター長	杉本 和弘	第 5 条第 1 項第 1 号 (大学等の教育機関の教員)
2 副委員長	東北工業大学地域連携センター 事務長	阿部 智	第 5 条第 1 項第 3 号 (本学の所在する地域の関係者)
3	尚綱学院大学 学長	鈴木 道子	第 5 条第 1 項第 1 号 (大学等の教育機関の教員)
4	株式会社ミヤギテレビサービス 非常勤相談役	高野 昌明	第 5 条第 1 項第 5 号 (本学の学部を卒業した者又は大 学院を修了した者)
5	宮城県美術館 館長	伊東 昭代	第 5 条第 1 項第 3 号 (本学の所在する地域の関係者)
6	石巻市立桜坂高等学校 校長	熊谷 聡也	第 5 条第 1 項第 3 号 (本学の所在する地域の関係者)
7	株式会社 一条工務店宮城 代表取締役社長	峯岸 宏典	第 5 条第 1 項第 2 号 (経済界の関係者)

② 東北学院大学外部評価委員会規程

平成20年4月1日制定第6号

改正

平成22年6月1日
平成28年3月22日改正第69号
平成29年12月26日改正第177号
平成30年3月28日改正第39号
令和3年3月10日改正第31号
令和3年3月31日改正第71号

(設置)

第1条 東北学院大学（以下「本学」という。）に、東北学院大学点検・評価に関する規程第14条、第15条及び第16条に定める外部評価を実施する機関として、東北学院大学外部評価委員会（以下「委員会」という。）を置く。

(目的)

第2条 委員会は、東北学院大学点検・評価に関する規程第4条第1号に規定する点検・評価報告書に基づいて第三者の立場から評価し、本学の教育・研究水準の向上及び組織の活性化に資する提言を行うことを目的とする。

(評価項目)

第3条 評価項目については、東北学院大学点検・評価に関する規程第3条及び同規程別表に定める点検・評価項目に準じて東北学院大学点検・評価委員会（以下「点検・評価委員会」という。）が検討し、学長に提案する。

2 前項の規定にかかわらず、点検・評価委員会による提案及び委員会による評価は、前項に定める点検・評価項目の趣旨を損わない限りで、評価項目を簡略化して実施することができる。

(評価の時期)

第4条 委員会が評価・答申を実施する年度は、公益財団法人大学基準協会による評価を含む外部評価の実施の間隔が2年を超えないように、適切に決定されるものとする。

2 点検・評価委員会は、委員会が評価・答申を実施する年度を検討し、学長に提案する。

3 委員会は、評価・答申を実施しない年度にあっても本学が行っている事業に関する簡略な報告を受けるものとする。

(組織の構成)

第5条 委員会の委員は、次の各号に掲げる者のうちから大学の運営に関する見識を考慮して学長が選考し、委嘱する。

- (1) 大学等の教育機関の教員
- (2) 経済界の関係者
- (3) 本学の所在する地域の関係者
- (4) 本学に在職した経験を有する者
- (5) 本学の学部を卒業した者又は大学院を修了した者
- (6) 前各号に定める者以外に、大学に関して広くかつ高い見識を有する者

2 委員の任期は、3年とする。ただし、再任を妨げない。

3 学長は、委員を委嘱した場合、委員の氏名、所属等を、速やかに点検・評価委員会に通知するとともに公表する。

4 委員会には、点検・評価委員会委員長のほか、本学の点検・評価に責任を持つ専任教職員が必要に応じて陪席する。

(委員長及び副委員長)

第6条 委員会に委員長及び副委員長1名を置き、委員の互選で定める。

2 委員長は、委員会の業務を統括する。

3 副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故あるときは、その職務を代行する。

(委員会の運営)

第7条 委員長は、学長の要請に応じて委員会を招集し、議長となる。

2 学長は、委員会において検討されるべき事項、評価を行う年度等について、点検・評価委員会の提案を参酌して委員会に提示するものとする。

3 委員会は、第2条及び第3条に基づいて行われた評価の結果及び改善を求める提言事項を外部評価報告書にまとめ、学長に提出する。

4 学長は、前項に定める外部評価報告書を点検・評価委員会に提出し、その内容を報告する。

(守秘義務)

第8条 委員会の委員は、この規程に基づく評価を行う際に知り得た事項のうち、秘すべきとされた事項は、他に漏らしてはならない。

(事務)

第9条 この規程に関する事務は、学長室政策支援IR課において処理する。

(改廃)

第10条 この規程の改廃は、点検・評価委員会が発議し、教授会及び大学院委員会の議を経て学長が行い、理事会の承認を得るものとする。

附 則

この規程は、平成20(2008)年4月1日から施行する。

附 則 (平成22年6月1日)

この規程は、平成22(2010)年6月1日から施行する。

附 則 (平成28年3月22日改正第69号)

この規程は、平成28(2016)年4月1日から施行する。

附 則 (平成29年12月26日改正第177号)

この規程は、平成29(2017)年12月26日から施行する。

附 則 (平成30年3月28日改正第39号)

この規程は、平成30(2018)年4月1日から施行する。

附 則 (令和3年3月10日改正第31号)

この規程は、2021年4月1日から施行する。

附 則 (令和3年3月31日改正第71号)

この規程は、2021年4月1日から施行する。

③ 2023 年度第 1 回東北学院大学外部評価委員会 議事録

※第一部を外部評価委員と大学関係者の陪席、第二部を委員のみで行った。
第二部の議事録は非公開とし、第一部分のみ掲載する。

2023 年度第 1 回東北学院大学外部評価委員会(第一部)議事録

1. 概要

会 議 名	2023 年度第 1 回東北学院大学外部評価委員会
開 催 日 時	2023 年 7 月 13 日 (木) 13 時 00 分～13 時 30 分 (第一部)
開 催 場 所	土樋キャンパス 8 号館第 1 会議室
出 席 者 (名簿順)	杉本和弘 (東北大学 高度教養教育・学生支援機構教育評価分析センター長) 阿部 智 (東北工業大学 地域連携センター事務長) 鈴木道子 (尚絅学院大学 学長) 高野昌明 (株式会社ミヤギテレビサービス 非常勤相談役) 峯岸宏典 (株式会社一条工務店宮城 代表取締役社長)
委任状提出	なし
陪 席 者 (事務局含)	大西晴樹 (学長)、千葉智則 (副学長 (総務担当))、中沢正利 (副学長 (点検・評価担当))、倉田洋 (学長室長)、渡邊義春 (総務部長)、齋藤涉 (高等教育開発室副室長) 阿部文智、廣瀬理行、武蔵幸子、佐藤壮 (以上、事務局 (学長室政策支援 I R 課))
欠 席 者	伊東昭代 (宮城県美術館 館長(元宮城県教育委員会 教育長)) 熊谷聡也 (石巻市立桜坂高等学校 校長)
成 立 確 認	委員総数 7 名、出席 5 名、成立定数はなし
配 付 資 料	【配付資料】 ● 資料 1-1 第 5 期 (2022-2024) 東北学院大学外部評価の概要 (※2022 年度第 1 回外部評価委員会資料より) ● 資料 1-2 東北学院大学外部評価委員会 2023 年度外部評価計画表 (案) 【参考資料】 ● TGU FACTBOOK 2022 ● 2023 年度外部評価の調査項目・観点 (案) ● 東北学院大学アセスメント・プラン (3 つのレベルにおける学修成果の評価指標一覧)
議 長	杉本委員長 (東北大学 高度教養教育・学生支援機構教育評価分析センター長)
司 会	中沢副学長 (点検・評価担当)
書 記	学長室政策支援 I R 課 (事務局)

2. 議事の経過及びその結果

挨 拶	
●	大西学長：今日はお集まりいただき感謝申し上げます。前回からだいぶ状況が変わり、新

キャンパスが開学し、新設4学部も立ち上がった。今年度は学生たちの礼拝出席、部活動の参加率も高まってきている。また新たなテーマでの外部評価となる。よろしくお願い申し上げます。

報告 1	2022年度外部評価について	了承
------	----------------	----

- 杉本委員長：2022年度に実施した外部評価について簡単にご紹介させていただく。今年度は第5期の2年目となるが、第5期の外部評価のテーマは学部・研究科における教学マネジメント体制の個別具体的な運用状況を評価対象としている。昨年度は教学マネジメントの基盤となるFD・SDの実施状況、教職員の能力開発について評価をさせていただいた。非常によく取り組まれているところと、特に人事評価のところで制度が変わるプロセスにあるところで、新たな制度への取り組みについて課題があった。教職員の育成や資質の向上が教学マネジメントの基盤として重要だと考えている。引き続き取り組んでいただければと思う。外部評価報告書と、外部評価報告書を受けてとした文書が既に大学ホームページで公開されていることを確認した。一つの視点として外部評価結果を使っていただければと思う。

第1号議案	2023年度外部評価テーマについて	承認
-------	-------------------	----

- 杉本委員長：資料1-2をご覧ください。昨年度の外部評価を踏まえて、今年度のテーマを決めたい。東北学院大学側と予め話をさせていただき、教学マネジメント体制の中の個別具体的な運用状況として、「内部質保証及び学修成果の検証に学生がどのように関わっているのか」に焦点を当て、書面及び学生インタビューを通して評価を行いたいと考えている。

書面調査については、大学側から状況についての資料を提出いただき評価する。細かいところは第二部でお話させていただくが、学修成果の検証ということが大学の質保証の中ではここ10年くらい、可視化についてはここ2、3年で急速に言われてきている。来年度の認証評価でも、学修成果の検証については内部質保証の中核を成すものとして評価の対象になる。先日2月の中教審の大学分科会の答申を見ると、第4期には認証評価機関に対して明確に学修成果の検証とチェックをさせることが書かれている。文科省の認証評価の内容を決める評価項目を決める省令に、明確に学修成果の検証や可視化を入れ込むようになってくるだろうと思う。今のところは明確ではないが、将来的な見通しを踏まえて学修成果の検証、さらに可視化は継続的に取り組んでいく必要がある。この機会に来年度の認証機関を受ける前にこのテーマを行うのは非常に時宜に合ったものと考えている。特に東北学院大学ではe-ポートフォリオを導入しており、学修成果の可視化の点で重要な手段だと思う。特に取り上げていきたい。e-ポートフォリオを用いて学修支援や研究指導等にどのように活用されているかを評価したい。

もう一つは、学生インタビューを行い、学修成果の検証の取り組みについて学生がどのように関わっているのかを評価したい。学生参画は国際的にも重要であり、日本でも近年重視され始めている。単に書面だけでは補足できないような内容について学生へのインタビューを通して明らかにしたい。予定表の中に書かれている通り、10月から11月に予定している第2回外部評価委員会で学生インタビューを実施させていただきたい。この学生インタビューに関しては、先ほどから繰り返しになるが、学修成果のe-ポートフォリオの活用、授業評価、研究指導等に関して外部評価委員から上がってきた質問を踏まえた学生インタビューとさせていただければと思う。対象学年としては各学

科1名程度、募集停止学科も含めて学年が均等になるように割り当てる。満遍なく学生を集めてインタビューをさせていただきたい。これからの予定に関しては、大学側から出していただいた資料に基づいて質問を外部評価委員会が準備をし、その内容を踏まえた学生インタビューに繋げていく。年度末には第3回の外部評価委員会を行い、それまでの間に外部評価報告書をまとめた上で大学に提出させていただくというスケジュールで進めさせていただきたいと考えている。今年度の外部評価の計画に関しては以上となる。テーマやスケジュールに関して何か意見はあるか。

- 峯岸委員：今までの外部評価で直接に学生インタビューをしたことがあるか。
- 杉本委員長：私は無いが、以前はやったことがあると聞いている。
- 齋藤高等教育開発室副室長：第3期に行った。授業中にアンケートを取るシステムがあるが、それを利用して行った。
- 杉本委員長：直接学生にインタビューをしたのか。
- 齋藤高等教育開発室副室長：そうである。
- 杉本委員長：昨年度、授業参観について委員からご提案をいただいていた、それとは少し違うが直接学生と話ができる。大学基準協会の認証評価でも学生のインタビューは必ず入れている。学生の声を聴くと、思っていることとは全く違う側面が見えてくることがある。大学側があまり認識していないことも含めて、良い意見が引き出せるのではないかと思う。
- 鈴木委員：何名へのインタビューになるのか。
- 齋藤高等教育開発室副室長：全学科となると21名になる。
- 鈴木委員：21名のインタビューを1時間で行うのは無理ではないか。
- 杉本委員長：時間を長くすることはできるか。また、人数を絞ることはできるか。
- 齋藤高等教育開発室副室長：前は各学科、各学年で60人近い人数を集めた。クリッカーを使って、予め用意した設問と、その場で質問し回答をしてもらった。それを今回は各学科1名としている。新学部の学生については1年生のみ、募集停止をした経済学部共生社会経済学科、工学部情報基盤工学科と教養学部は2年生以上に限定される。一人ずつ分かれてインタビューをするのか、それとも一斉のインタビューをするのかについては今後の議論となる。
- 鈴木委員：1時間で21名となるとクリッカーを使って数を取るのか、数名ずつ詳しく聞いていくのかは検討が必要である。インタビュー項目を絞ることも必要かもしれない。自由に話していたら1時間では足りない。
- 齋藤高等教育開発室副室長：前回の第3期2018年度の実施でもインタビュー項目については予め決めたもので行っていた。学生からも事前アンケートをとり、その上でインタビューを行った。
- 杉本委員長：アンケートを事前にとることも可能性としてはある。
- 鈴木委員：特に確認したいことを決めておいて、1時間を使う。気持ち的には少し学生たちが自由に話す時間があつた方が良い。これについてどうですかと聞くだけでは面白くない。
- 杉本委員長：時間を1時間半にすることは可能か。
- 齋藤高等教育開発室副室長：可能である。
- 峯岸委員：例えば5名×20分×4で1時間20分で行うのはいかがか。
- 杉本委員長：そのようなやり方もあると思う。
- 高野委員：学生の話が聞ける良い機会だと思う。やり方が重要だ。時間をかければ良い

というものでもない。我々の聞き取りの仕方を考えなければならない。

- 杉本委員長：8月下旬から9月上旬という予定表の中で外部評価委員から提出された質問、あるいは学生インタビュー項目を委員の先生方に出していただき、事務局でとりまとめる。学生インタビューまで全く調整しないということではなく、その間に少し質問を絞ったりすることは必要だと思う。認証評価の学生インタビューでは点検・評価報告書で見えてこないような、学生に聞くことが一番効果的だと思われることに焦点を絞って聞くことが多いが、特に今回はe-ポートフォリオがある。またアセスメント・テストなど学生が一番身近にあることに対してその効果をどう捉えているのか、効果をどう見ているのか聞きたい。あるいは授業評価について、授業評価をしても授業が変わっていない、どう使っているのかという思いはどこの大学でもあると思う。

他に意見はあるか。テーマとしてはこれが前提ということで話を進めさせていただきたい。項目等観点を準備させていただいたので、第二部ではそれを踏まえた議論をさせていただきたい。大枠としては、今年度は学修成果の検証に関して学生の関わりを書面やインタビューで確認させていただくことをテーマにする。なかなか多面的なので委員の先生方で詰めていきたい。

第1号議案を了解いただいたこととしたい。

- 大西学長：時宜にかなったテーマで有難い。よろしくお願い申し上げます。

第一部が13:30に終了した。

(陪席の東北学院大学執行部、事務局のうち阿部、廣瀬退席)

3. 次回予定

開催日時	2023年10月～11月
開催場所	未定
報告(予定)	未定
議案(予定)	学生インタビュー

以上

④ 2023 年度第 2 回東北学院大学外部評価委員会 議事録

※ 第一部を外部評価委員のみで実施し、第二部は委員と大学関係者の陪席により、第一部と第二部の間に実施した学生インタビューの報告を行った。
第一部の議事録は非公開とし、第二部分のみ掲載する。

2023 年度第 2 回東北学院大学外部評価委員会（第二部）議事録

1. 概要

会 議 名	2023 年度第 2 回東北学院大学外部評価委員会
開 催 日 時	2023 年 11 月 9 日（木）16 時 30 分～17 時 12 分（学生インタビュー終了後）
開 催 場 所	土樋キャンパス 8 号館第 1 会議室
出 席 者 （名簿順）	杉本和弘（東北大学 高度教養教育・学生支援機構教育評価分析センター長） 阿部 智（東北工業大学 地域連携センター事務長） 鈴木道子（尚絅学院大学 学長） 高野昌明（株式会社ミヤギテレビサービス 非常勤相談役） 伊東昭代（宮城県美術館 館長（元宮城県教育委員会 教育長）） 峯岸宏典（株式会社一条工務店宮城 代表取締役社長）
委任状提出	なし
陪 席 者 （事務局含）	大西晴樹（学長） 千葉智則（副学長（総務担当）） 村野井仁（副学長（学務担当）） 中沢正利（副学長（点検・評価担当）） 倉田 洋（学長室長） 渡邊義春（総務部長） 中村教博（高等教育開発室長） 齋藤 渉（高等教育開発室副室長） 阿部文智、武蔵幸子、佐藤壮（以上、事務局（学長室政策支援 I R 課））
欠 席	熊谷聡也（石巻市立桜坂高等学校 校長）
成 立 確 認	委員総数 7 名、出席 6 名、成立定数はなし
配 付 資 料	【配付資料】 ● 資料 1 学生インタビュー実施要領 ● 資料 2 2023 年度第 2 回外部評価委員会学生インタビュー（学生用説明資料） ● 資料 3 学生インタビュー参加者名簿 ● 資料 4 学生インタビュー事前アンケート結果 ● 資料 5 2023 年度外部評価_学生インタビュー項目
議 長	杉本委員長（東北大学 高度教養教育・学生支援機構教育評価分析センター長）
司 会	杉本委員長（東北大学 高度教養教育・学生支援機構教育評価分析センター長）
書 記	学長室政策支援 I R 課（事務局）

2. 議事の経過及びその結果

開	会	学長挨拶
<ul style="list-style-type: none"> ● 大西学長：学生は学ぶ側の立場から発言をしてくれたと思う。学生像を用意して臨むこともしなかったので、実像を反映する学生が参加してくれた。様々なことがわかったと思うのでご報告、ご意見をいただきたい。よろしくお願い申し上げます。 		
内	容	学生インタビュー実施結果報告、意見交換
<ul style="list-style-type: none"> ● 事務局（武蔵）：学生インタビューを実施した結果について学部評価委員の皆様から大学に向けて報告をお願いします。 ● 杉本委員長（Aグループ担当）：本日1時間半にわたり、2つのグループに分けて学生の意見を聞いた。やはり学生を通して、大学のことが一番よくわかると感じた。参加した学生は素晴らしかった。主体的に答えてくれ、ちゃんと学んできている学生たちであったため、本当に大学のことがよくわかるインタビューとなった。 <p>学生は学修の主体である。学生が納得できる成績評価や授業評価アンケートなど改善の取り組み、TG-folio もそうかもしれないが、そういったツールは学生の納得や理解がないと実質的なものになりえない。先生方が全て同じように対応していただくのは理想だが、それはあり得ない。学生からは、ある先生はよく対応している様子が伝わったが、そうではない先生の話もあった。成績評価も同様であるし、フィードバックの大切さも学生から声が上がってきていた。学生の理解、納得のために大学からの働きかけがもう少しできないだろうか。貴学だけの課題ではないが、大学側から学びの支援、仕掛けがもう少しあっても良いと感じた。よくやっているのは学生の声を通して伝わったが、まだまだやれることは沢山あると感じた。</p> <p>成績評価やポートフォリオを使って学修成果を可視化すると言ってもツールがあるだけではなかなか納得や理解を得るのが難しい。働きかけに課題が残っていると改めて感じた。</p> ● 阿部副委員長（Bグループ担当）：90分間、10人の学生に話を聞いた。90分であったが短時間で終わったような印象であった。総じて学生生活そのものも教育プログラムと考えると、大学として整った形で対応されていると感じた。参加した学生は相応の学生だと思うが、自分の意見を話していた。 <p>その中で、大学院生からの話では研究環境は問題ないが、先生が出張などで忙しくしていることから相談することへの遠慮があるようだった。そのあたりはどのような対応が必要か難しいところではあるが、印象的な話であった。</p> <p>また海外留学の重要性については理解しているが、支援や機会が少ないため増やして欲しいとの意見があった。また他の院生からは、円安もあり国外学会への参加の経済的負担が大きいという意見や、学部生から部活動の遠征も同様に経済的負担が大きいという意見があった。</p> <p>e ポートフォリオについては、実際に使っていない2、3年生だったため具体的な話はなかった。</p> <p>授業改善のためのアンケートは、時期的なことも含めて遠慮して率直に書けない、特に院生は人数も少なく、アンケート調査に回答すると様々な部分で不利益なことが跳ね返ってくるのではないかとということで率直に書けないという話が出てきた。</p> <p>大きな改善の必要性は見られなかったが、細かいところで考えていることは垣間見られた。</p> 		

- 鈴木委員（Aグループ担当）：本当に良い学生さんたちだった。東北学院大学に在学していることに誇りを持っている。地域とのかかわり、卒業生の多さなどで東北学院大学で良かったと実感しているようだった。

成績評価についてはどこの大学でも同じだが、評価基準が曖昧なこと、レポートへのフィードバックがないところが学生にとって不満のようであった。評価の基準については事前に示していただきたいし、結果についてはフィードバックをしてもらいたいという希望があった。

授業評価アンケートは教員の姿勢に左右されている様子が見られた。趣旨をしっかりと説明してから、記入して下さいと、回答の時間を取ってもらえればしっかりと記入するが、適当にと言われれば適当に答えてしまう。ただ、アンケートへの回答結果を受けて、教員のその授業が改善しているかどうかを後輩に確認した学生もいた。学生たちはしっかり見ていると思う。

学修成果の可視化は難しいという本質的な話しをされた学生がいた。アセスメント・テストやTG-folioよりは、外部資格の取得やゼミのプレゼンテーション、取得単位の数などで自分の成長を実感するとのことであった。アセスメント・テストやTG-folioなど大学で準備するものはなかなかうまく活用できない。かなり費用をかけて導入していると思う。学生たちがそれをうまく使うには、相当な説明、指導が必要だと思った。

学修、進路等に対するサポートについては人的サポートも十分であり、環境についてはほとんど不満が無いようであった。

要望については大学を24時間開けてほしい、他学科と交流したいという希望があった。
- 高野委員（Aグループ担当）：自分がどう評価されているかフィードバックが欲しいと言われていたのが一番印象に残った。大学の支援については満足しており、学生は有り難いと話をしていた。良い学生ばかりでしっかり意見を持っていて安心した。学生たちは青春を謳歌していると感じた。いろいろな不満もあったが、概ね学生生活には満足している様子であった。

セキュリティの問題はあると思うが夜遅くまで研究しているので、なるべく大学を開けてもらえると有難いと意見があった。

就職支援の話をしたところ真剣に聞いてくれた。将来自分の進む道をしっかり考えている。
- 伊東委員（Bグループ担当）：学生と直接話す機会を作っていただき感謝する。他の委員から話があった通り、とてもしっかりした学生が多かった。Bグループは2、3年生と院生であったが、かなり目的意識、出口を考えており明確に話が出る学生が多い印象であった。そのため何をやるかということも考えている。授業評価については遠慮もありつつ、授業が終わってしまうとアンケートをしなくてもまあいいかという感じになってしまうとのことであった。大学として個別の事例を把握すると、その先生がどうこうだけではなく、全体のレベルが上がるのではないかと思う。今回のような主体的に頑張っている学生たちではない学生が、どう相談するのかに関心があったが、それに関連した意見では、なかなか大学に出てこなくなった学生がいたときに、先生や院生の対応では限界を感じる、大学としての仕組みが課題ではないかという話も少し出てきた。学生数も多い中で一人一人にどう対応するのかは難しいという印象であった。
- 峯岸委員（Bグループ担当）：90分があつという間に過ぎた印象であった。一つ不満があるとすればスペックが高い学生が揃いすぎている。本当に素晴らしい学生が多かつ

た。

大学における学びの目的を学生が持っているか、大学の学びは直結しているか、加えて、自分の今後のキャリアと今の学びが直結しているかを聞いたかった。今日の学生はきちんと目的、目標を持っており、キャリアパスもある程度見えている学生であった。そういう学生は学びに対して興味や関心を持って主体的に学んでいる。一方で、目的や目標を持っていない学生はどういう4年間を過ごしているのか見ていかなければならない。学校に来て卒業できればOKと思っている学生を表面化させないと本質が判らない。TG-folioについては、使っていない2、3年生であったが成長過程が可視化されて就活に生かせるということの説明した。目標設定をして、資格を取得したり、ボランティア活動をしたりという自分の成長過程が見える、且つ、就活にそれが生かせるという仕組みは興味があるようであった。

大学院生については分母が少ないため、孤立する傾向が若干あるのではないかと感じた。分母が少ないため特定されてしまうと思い、アンケートに素直に書けない。直接利害のない窓口が示されれば相談できる先が増えて院生が孤立しないのではないか。また博士後期課程まで行くと次の道が見えない、就職キャリアセンターにも院生向けの相談窓口があると良いと思った。

意見としては、礼拝時間に学生窓口を開けてほしいという要望があった。五橋のエスカレーターが常時運転しているのがもったいないという意見もあった。コスト意識が高い学生で部活動や学会発表の経費に回して欲しいという意見であった。

また自分の経験からも海外提携校の増強をお願いしたい。日本人はもっと海外に出ていくべきである。海外に出て日本の良さへの気づきもある。

- 事務局（武蔵）：続いて、大学関係者からひと言ずつ感想をお願いする。
- 中沢副学長（点検・評価担当）：大学院生は、人数が少ないために授業評価アンケートに答えづらいという点は、前から指摘されていた。そのため今年は大学院生向けに別のアンケートを実施した。教育面の不満、研究面の不満、研究環境の不満、経済面の不満などについて聞いた。予想より集まらなかったが、授業以外の意見も収集できた。今年初めての試みであったが、大学院生は別にアンケートを行った方が良いと感じた。経済的な話はどうしても出てくる。大学院生がどう思っているのか聞いていきたい。
- 村野井副学長（学務担当）：貴重な意見をいただいた。成績評価に対して基準が曖昧で学生に不満があることについて、学内のFD研修会を強化しなければならないと感じた。これまでも達成目標をシラバスで示すなどしているが、成績をどのくらいの範囲でつけるのか、成績評価に関する全学的な共通理解が少し弱いところがある。フィードバックがないことにも対応が必要である。おそらく少人数の授業ではフィードバックしていると思うが、中規模、大規模の授業でどう返していくかについてもFDでアイデアを出しながら対応したい。教職員に対するFD研修会で詰めていかなければならないと改めて感じた。

辞めていく学生に対してどこまで手を伸ばせば良いかという意見があったのは、本学の学生のやさしさだと思う。休退学者に対する対応は、今まで学生部、各学科、学生相談室などでやってきたが、全学的な対応が出来ていなかった。学長の指示のもと、そこにTG-folioもかませながら、休退学者を無くして行こうと全学的な対応を検討しているところである。それと同時にピアサポートの体制も作って行こうと考えていたが、今日、学生からそのような声が出ていると聞いてとても良い方向だと感じた。

- 千葉副学長（総務担当）：峯岸委員から世界に飛び出す仕組みが必要との話があった。学長からの指示のもと、来年4月からグローバル教育センターを設置予定としている。コロナ渦で国際交流、国際教育はかなり停滞してしまった。留学生の受け入れ、送り出しもかなり少なくなってしまったので、ここから4年間で元通り、あるいはそれ以上になるよう、新しい教学組織としてグローバル教育センターを立ち上げ、留学生の受け入れ、送り出しを強化していきたい。学生が伸びる瞬間は様々あるが、個人的にも特に海外留学の経験者の成長は非常に大きいと考えている。多様化という面でも推進していきたいと考えている。
- 大西学長：学生からどんな意見が出るか懸念していたが、明るく語ってもらえたようで良かった。

本学の弱点、これまで取り組んでこなかったことに委員の先生方が気づかれたが、放置できない問題であり、それぞれの対応を考えている。学生が積極的に関わることが大事だと思う。学修者本位の姿勢をもってもらうための仕組みを考えていかなければ変わらない。実質化することは大変だが、どこかで舵を切らなければならない。大学の弱点をどうやって克服していくか、色々な課題とぶつかりながらやっているところである。

今年、休退学者の対策について取り組んでいる。良い大学は退学率が低い、本学はそれなりにある。学校にいても満足感が低いから辞めていく。どうやって引き付けていくか、IRの力を借りて、しっかりと1年生の前期、後期の評価を見て要注意人物へは必ず面接をして、結果をIRで集計し各学部の先生方に伝えながら進めていきたい。

またeポートフォリオの活用がどれだけ学修者本位になるのかこれからチャレンジしていかなければならない。学生が書いたことに教職員がコメントするような関係を作らなければならない。目的達成に方向付けることにも力を入れなければならない。

ピアサポートについては、バッジをつけてもらう事も動き出した。評価の見直しもしている。GPと教育目標に対しての達成度、外部試験についても反映させて、学修の進捗を学生自らが捉えていくようにしたい。

国際化に関しては、ミッション系なのになぜ留学生が少ないのかと思っていた。グローバル教育センターを立ち上げる。国際交流は大事で国際学部も作った。留学生をどんどん増やしていきたい。今回課題だと思ったのは院生の留学プログラムである。知恵を絞ってやっていきたいと思う。
- 事務局（武蔵）：今後の外部評価委員会の予定については、書面評価についての大学のやり取りと、本日の学生インタビューの結果を踏まえたものを、委員の所見も含めて報告書としてまとめる。今年度はあと1回委員会を開催して、大学に報告書をいただく流れとなる。次回まではメール等で委員の方々とやり取りさせていただきたい。
- 杉本委員長：委員の方々にはメールでお願いが来る。所見を書いていただき、私の方でまとめさせていただき作業に入る。書面調査でまだ十分に回答が出てきていないところがある。重要なところなので必ず出していただきたい。それに本日学生から聞かせていただいたものを合わせながら、今回は基本的に学修成果の可視化、教育活動の取組状況の観点で評価させていただき、まとめさせていただく。次回は3月になると思う。

今回、書面調査で各学部の取組状況を確認させていただき、その上で学生に近いところで何が生じているのか、どう学生が認識しているのか聞かせていただいた。2つを重ね合わせてみると、学長が言われた通り、学生の意見を直接聞く機会はリアリティがある。大学改善の一番の契機になると今回改めて思った。外部評価委員会として書面調査

は重要だが、学生から見えているところと書面調査の像のずれがあると感じている。外部評価委員会に限らず、今後も学生の意見を聞いていただき、改善を続けていただきたい。中教審や文科省が言っているツールを導入することはアセスメント・テストや、ポートフォリオもそうだが、学生の納得がないと、ほぼ意味をなさないと思っている。今日は学生が環境や支援に本当に満足していると感じた。東北学院大学の強みである。地域との関係もそうだが、強みを生かすには学生の意見、声が一番活きる。是非学生との取り組みを外部評価委員会に関係なく続けていただきたい。

委員長が議事の終了を宣言し、17:12に閉会した。

3. 次回予定

開催日時	2024年3月頃
開催場所	未定
報告（予定）	未定
議案（予定）	2023年度外部評価報告書の提出

以上

⑤ 2023 年度外部評価委員会学生インタビュー報告書

2023 年度外部評価委員会学生インタビュー報告書

1. 学生インタビュー実施概要

(1) 実施目的

第5期（2022～2024 年度）外部評価委員会において評価対象としている「教学マネジメント体制の個別具体的な運用状況」を確認するため、内部質保証及び学修成果検証への学生参画に焦点を当て、学修成果、e-ポートフォリオの活用、授業評価・学修支援、研究指導等について在学学生インタビューを通じて運用状況を明らかにする。

(2) 調査対象者

学科長・研究課長より推薦された学部生、院生
（学科・研究科在学生より各1名、計27名）※当日1名欠席

(3) 日時

2023年11月9日（木）14：30～16：00（90分）

(4) 場所

土樋キャンパス8号館3階 第3・4会議室

(5) インタビュー実施方式

① 事前アンケート（Google フォーム） ※設問は別紙参照

② グループインタビュー（座談会形式）

（内訳）

A グループ		B グループ	
学部1年生	: 8名	学部2年生	: 1名
学部4年生	: 8名	学部3年生	: 4名
		博士前期課程1年	: 1名
		修士課程2年	: 1名
		博士前期課程2年	: 1名
		博士後期課程1年	: 1名
		博士後期課程3年	: 1名
計16名		計11名	

2. 学生インタビュー記録

Aグループ（1年生、4年生）

【観点1】学修成果の検証及び可視化

<成績評価について>

- ・ 最終レポートの評価基準が不透明。
- ・ グループワークにおいて、グループの成績が自分の成績になってくるのは納得できない。
- ・ レポートのふりかえりの時間に、「文字数が少ないと減点しました」と言われたが、文字数の多少で点数が変わるのは伝えられていなかった。困る。評価基準があいまい。

- ・ 数学の採点結果のフィードバックはほしかった。
- ・ 「手をあげると点数が上がる」授業を受けているが、それは授業が活性化してよい。
- ・ 成績申し立て期間が短い。申し立てしても当たり障りない回答が来ただけだったので、それ以来していない。
- ・ クラス分けをしたほうがよい。習熟度レベルにより取り組み具合が違う。
- ・ 教員間により、成績評価が違いすぎないか？最後の授業だけ出れば単位が確定する授業がある。

<授業評価アンケートについて>

- ・ 映画と宗教を結び付けた講義はわかりやすくよかった。それは自分たち世代の意見が反映された結果ではないかと思った。
- ・ ミクロ経済入門でPDF丸投げがあった。アンケートに意見を書いたら、後輩のときには動画が一緒についてきたということで、改善を感じた。
- ・ 専門分野の人数が少ない学問については教員の代えがきかないので、意見を書いても変わらないのではないか？
- ・ 教員から適当にやっておいてという雰囲気を出されると、学生も回答が適当になる。
- ・ 教員がしっかりと説明をし、回答時間を設けてくれる先生だと、授業も変わっていきそうと感じる。
- ・ 前期授業の資料の使いまわしを後期授業でしないで欲しい。

<アセスメント・テストなど自分の学びとその結果の成長・不足を確認できる機会があるか？>

- ・ 民間の資格取得で実感する。そういう力がついたことが確認しやすい。
- ・ ゼミの全国プレゼン大会で、決勝に行くことができた。結果を残せたことで、これまでの学びの実感ができる。
- ・ 授業で学んだことを、別の授業で達成度を確認する。授業間で、段階的に積み上げていけることが実感できたときにそう感じる。
- ・ 点数が出るのはいいが、自分の立ち位置がわからない。授業内の標準偏差などをすべての授業で出してもらうことはできないか。心理学概論では標準偏差などを出してくれた。
- ・ 可視化は難しいのではないかと考えている。数値を見て実感するよりも、相手とのコミュニケーションの中で気づくものなのではないか？
- ・ 取得単位数で可視化できている。
- ・ 相対評価したほうがよいのではないか？

【観点2】eポートフォリオの活用

<TG-folioは使用しているか？>

- ・ 学期目標を入れている「資格を取りたい」、「そのために何をやる」。人により入力具合が異なる。
- ・ 前期分を見返したら、アバウトなことしか書けていなかった。可視化できたとして、その先どのようにすればよいかわからない。
- ・ とてもよいものだと考えている。1年生からコツコツ、自分のやってきたことをまとめていけるのはとてもよい。振り返りもできる。就活にも活用できる。

<DP（ディプロマ・ポリシー：学位授与の方針）>

- ・今回初めて知り、確認したところ、今学んでいることと違いはそんなにないと感じた。
- ・入試の時に調べたので、頭に入ってはいるが、学科において説明される機会はなかった。
- ・オープンキャンパスの手伝いで、教員からの説明で、同じ学部でも学科間の違いがわかった。

【観点3】学修支援・研究指導に関する取組

＜学生支援（学修、キャリアなど）の体制について＞

- ・教務課や就職キャリア支援課だと、勉強の相談、就職の相談は、しっかりしている。
- ・公務員になる勉強をしているが、勉強環境が保証されている。23時まで開いている施設もあり、施設が充実している。
- ・国際学部生のみが使える英語の新聞を読めるサイトがある。しっかり勉強したい学生のために提供してくれている。無料で読めるのがよい。ありがたい。教科書提供サイトにもアクセスでき、英語力向上にとっても役立っている。

【その他】

＜大学への要望＞

- ・夜間締め出しが困る。コンペ参加のための準備のためなどで使用したいので、24時間施設利用できるようにしてほしい
- ・国際学概論の授業で、思想の偏りすぎた授業を行うことはやめてほしい。
- ・施設利用時間の延長について改善してほしい。
- ・他学科との交流がない。学科を超えた動きがあまりないのではないかな。

Bグループ（2年生、3年生、院生）

【観点1】学修成果の検証及び可視化

＜DP（ディプロマ・ポリシー：学位授与の方針）について、どのように理解したか、それに向けて自分の力が上がっているのをどう感じているか？＞

- ・学会で自分の成果を発表できた。
- ・大学院進学を決めた3年後期に、進学に必要な成績の条件を調べる過程で知った。
- ・知らなかった。今回の事前アンケートで知った。
- ・DPよりもGPAや成績の方が成果として理解しやすい。

＜授業は面白いかな？＞

- ・面白い。英語の深いところを学べる。音韻論など、実践できるのが良い。
実践できる場として、国際ボランティア（団体）がある。仙台在住の学生の住民登録のサポート、イングリッシュカフェなど。将来は英語の教員になりたい。
- ・模擬授業（小学校教員）が印象に残っている。児童生徒が興味を持ってくれる方法を教えてもらえて、大学が後押ししてくれていると感じる。
- ・大学院は授業が少ない。修了するための単位の授業は面白くないものもある。
- ・フィールドワークを大切にしている先生も多く、楽しい経験ができています。
- ・大学院の授業で、社会人学生と一般学生でボリュームのバランスが難しい。社会人学生は時間的に厳しいが、一般学生はせっかく入ったから学びたい。
- ・社会保障系の授業でスライドが共有されずメモをするのが大変だった。オンデマンドがいい。
- ・授業名が違うだけの新たな気づきが少ない授業もある。基礎的なところが重複。先生同士で

連携して欲しい。

<授業改善のためのアンケートについて>

- ・ ある授業では、前期でこういう意見があったから後期は改善する、といったこともあった。
- ・ 院生は人数が少なく特定されるため、今後の論文指導に影響が出ないか懸念もあり、意見を言いづらい。
- ・ アンケートは授業期間が終わってからなら改善してほしいことを自由に書ける。大学院は授業期間の途中、紙で回収でやっている。
- ・ 最後の課題で疲れて、アンケートは「もういいや」となる。

【観点2】eポートフォリオの活用

<TG-folioは目標設定をし、成長可視化できるシステム。使ってみたいと思うか?>

- ・ 使ってみたい。

【観点3】学修支援・研究指導に関する取組

<グループ主任の先生に相談したことがあるか>

- ・ グループ主任は相談するほどの距離感ではない。言語文化は担当の言語の先生が頼れる先生となる。
- ・ 相談するような困ったことが無かった。
- ・ グループ主任ではなく、履修した授業で仲良くなった先生とコミュニケーションする。チューターの先生との面談はあるが、どうしても身近の毎回会う先生に頼ってしまう。
- ・ 大学院は、困ったことがあれば担当の教員へ相談する。言いにくいときは他の仲の良い先生へ相談している。
- ・ 研究室に配属される学生の面倒を見るのは院生と教員（助手がいないため）である。来なくなった学生がいる場合など、対応できる範囲が少ない。先生は学生に電話するなどしているが、大学の学修支援課などに支援してほしい。
- ・ 先生が忙しすぎる。出張も多い。イライラしていそう、忙しそうなどの理由で相談を遠慮してしまう。
- ・ 博士課程を修了して、大学教員などのアカデミックなポストに就きたいとき、大学の公募の情報は自分でチェックしている。院生同士でそういう空気にならない。関東・関西圏の教員・院生と情報共有しないとイケない。大学にも支援の窓口が欲しい。教員になるにも教育歴が必要で、卒業してからの立場が難しい。

【その他】

<大学への要望>

- ・ 五橋キャンパスのエレベーターが無人の時にも動いていて電気代がもったいない。部活の遠征費も、援助金がもらえるがきつい。SDGsの取り組みのアピールもできるので、節約して課外活動へ還元をして欲しい。
- ・ 研究支援をもっと充実して欲しい。学会は実績になるのでできるだけ多く参加したいが、援助金は国内2件、国外2件しか申請できず、上限も国内3万円、国外10万円。TA等のアルバイトをしても赤字なので、援助金の件数と金額を増やして欲しい。
- ・ 礼拝の時間帯に学生窓口が閉まるのが困る。この時間しか行けないときがあるので、一つだけでも開いていて欲しい。職員が礼拝に行っているなら納得できるが、そうではない。

- ・ 教室のプロジェクタ出力に MacBook 用のアダプタを備え付けてほしい。
- ・ 留学生との交流が少ない。提携校も少ない。行く機会は大事である。頭が柔らかいうちにチャレンジをして欲しい。先輩が行った経験を聞いて、自分も行きたくなるような取り組みが良いと思う。提携校や機会を増やすことと、単位認定（留年しなくていい）制度を整えて欲しい。

以上

⑥ 学生インタビュー事前アンケート結果概要（自由記述を除く）

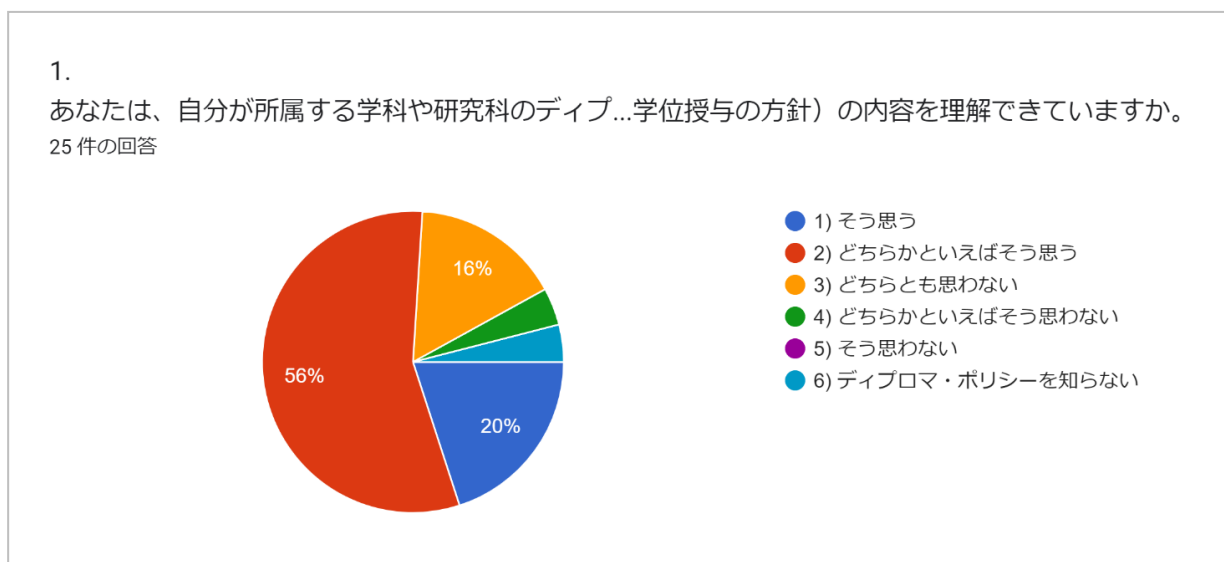
<アンケート実施概要>

- アンケート実施方式：Google フォームを利用
- 実施期間：2023年11月1日（水）～7日（火）
- 対象者：28名（学生インタビュー対象者＋予備1名）
- 回答数：25名

<質問・集計結果>

【質問】東北学院大学におけるあなたの経験について質問します。これまでの自分自身の経験を振り返って、教えてください。

1. あなたは、自分が所属する学科や研究科のディプロマ・ポリシー（学位授与の方針）の内容を



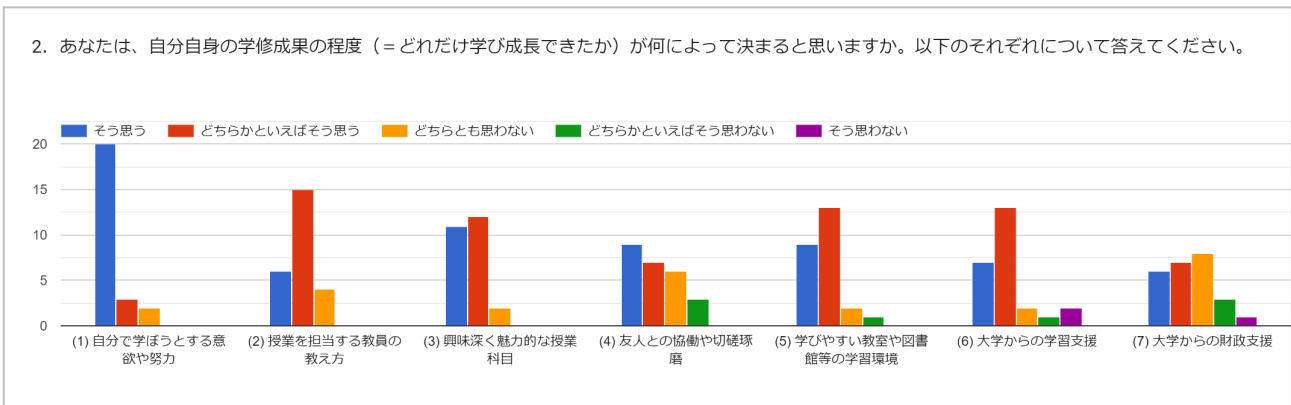
理解できていますか。

回答方法：「そう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらとも思わない」「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」「ディプロマ・ポリシーを知らない」

2. あなたは、自分自身の学修成果の程度（＝どれだけ学び成長できたか）が何によって決まると
 思いますか。以下のそれぞれについて教えてください。

- (1) 自分で学ぼうとする意欲や努力
- (2) 授業を担当する教員の教え方
- (3) 興味深く魅力的な授業科目
- (4) 友人との協働や切磋琢磨
- (5) 学びやすい教室や図書館等の学習環境
- (6) 大学からの学習支援
- (7) 大学からの財政支援

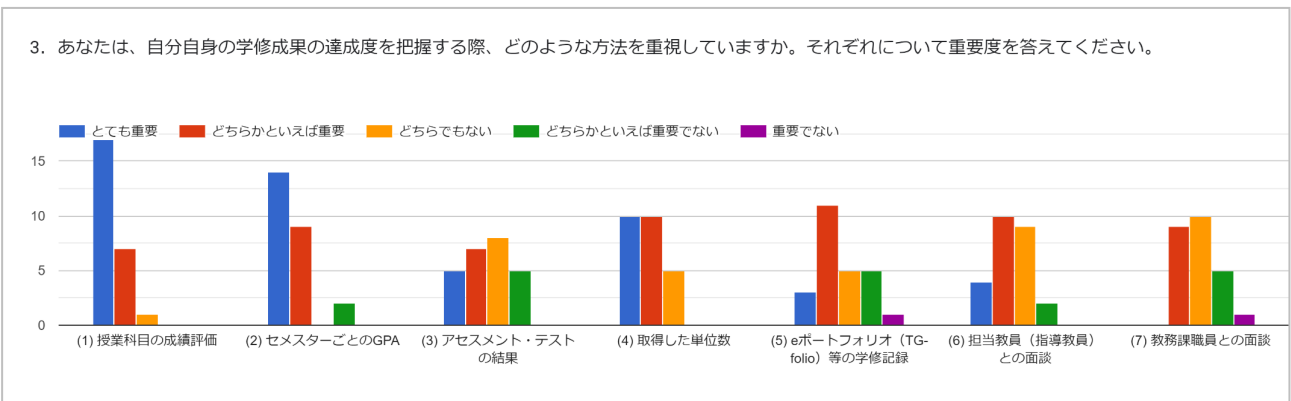
回答方法：「そう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらとも思わない」「どちらかとい
 えばそう思わない」「そう思わない」



3. あなたは、自分自身の学修成果の達成度を把握する際、どのような方法を重視していますか。そ
 れぞれについて重要度を教えてください。

- (1) 授業科目の成績評価
- (2) セメスターごとの GPA
- (3) アセスメント・テストの結果
- (4) 取得した単位数
- (5) eポートフォリオ（TG-folio）等の学修記録
- (6) 担当教員（指導教員）との面談
- (7) 教務課職員との面談

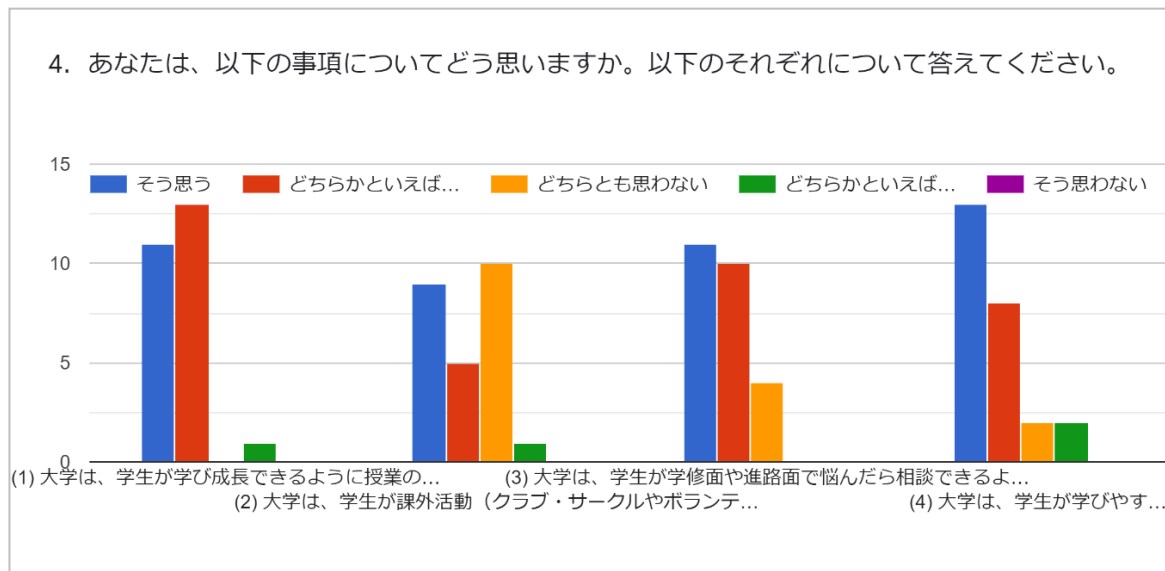
回答方法：「とても重要」「どちらかといえば重要」「どちらでもない」「どちらかといえば重
 要でない」「重要でない」



4. あなたは、以下の事項についてどう思いますか。以下のそれぞれについて教えてください。

- (1) 大学は、学生が学び成長できるように授業の方法や内容を工夫・改善している
- (2) 大学は、学生が課外活動（クラブ・サークルやボランティア等）に取り組みやすいように支援している
- (3) 大学は、学生が学修面や進路面で悩んだら相談できるようにしている
- (4) 大学は、学生が学びやすいように施設設備を整備している

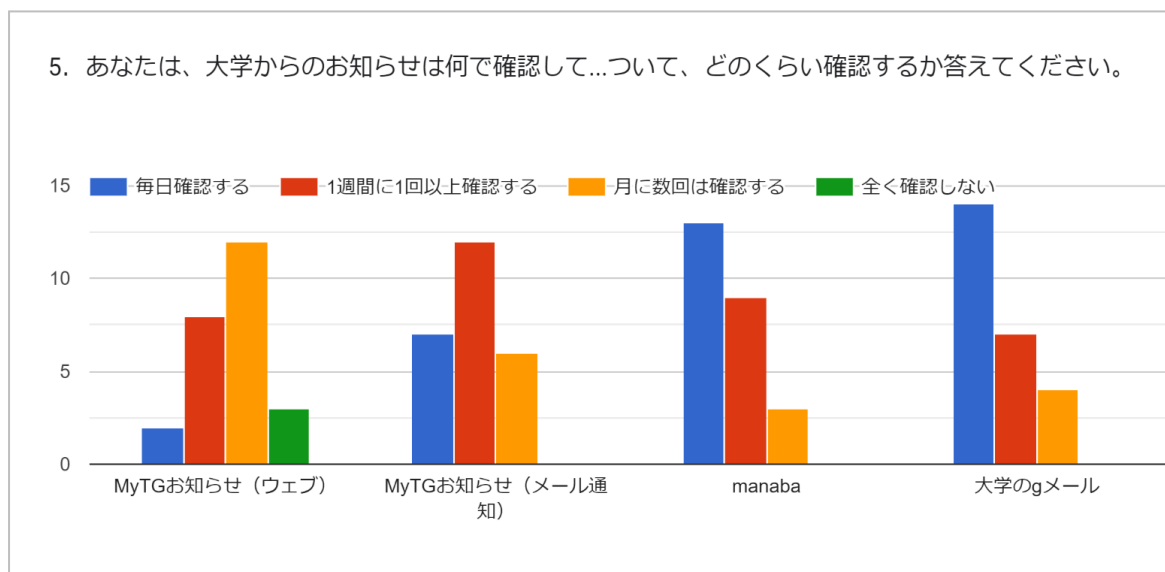
回答方法：「そう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらとも思わない」「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」



5. あなたは、大学からのお知らせは何で確認していますか。以下のそれぞれについて、どのくらい確認するか教えてください。

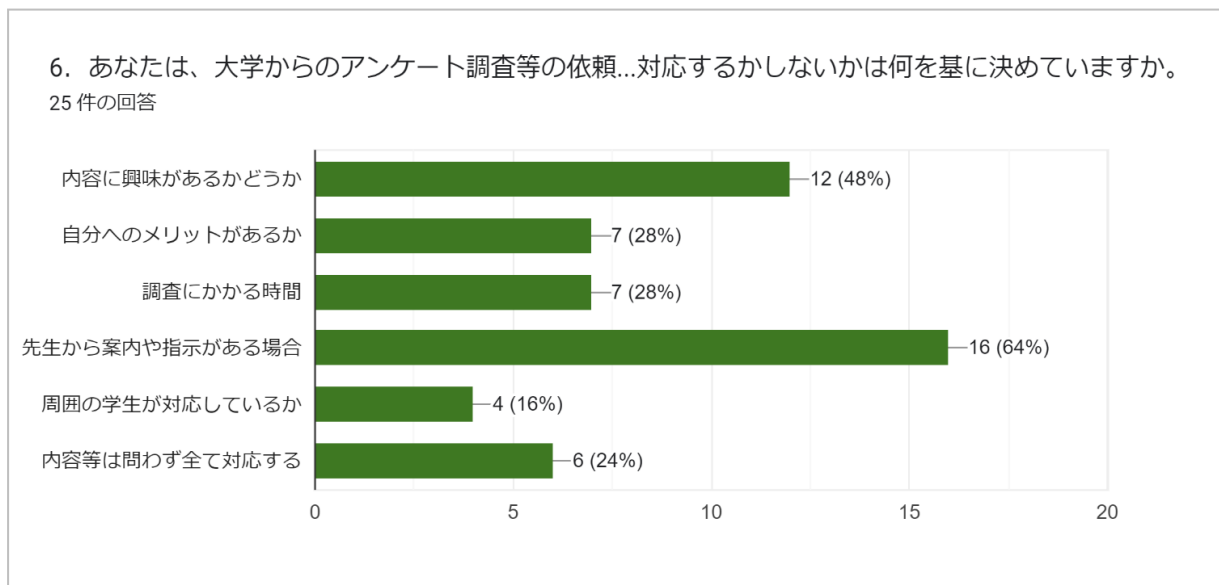
- (1) MyTG お知らせ（ウェブ）
- (2) MyTG お知らせ（メール通知）
- (3) manaba
- (4) 大学のgメール

回答方法：「毎日確認する」「1週間に1回以上確認する」「月に数回は確認する」「全く確認しない」



6. あなたは、大学からのアンケート調査等の依頼について、対応するかしないかは何を基に決めていますか。（複数選択）

- (1) 内容に興味があるかどうか
- (2) 自分へのメリットがあるか
- (3) 調査にかかる時間
- (4) 先生から案内や指示がある場合
- (5) 周囲の学生が対応しているか
- (6) 内容等は問わず全て対応する
- (7) その他（ ）



7. 最後に、東北学院大学生・院生として、大学にお願いしたいことがあれば自由に記入してください。

（回答は非公開）

⑦ 2023 年度第 3 回東北学院大学外部評価委員会 議事録

※ 第一部を外部評価委員のみ、第二部を委員と大学関係者の陪席で行った。
 第一部の議事録は非公開とし、第二部分のみ掲載する。

2023 年度第 3 回東北学院大学外部評価委員会(第二部)議事録

1. 概要

会議名	2023 年度第 3 回東北学院大学外部評価委員会
開催日時	2024 年 3 月 25 日 (月) 16 時 00 分～17 時 00 分 (第二部)
開催場所	土樋キャンパス 8 号館第 1 会議室
出席者 (名簿順)	杉本和弘 (東北大学 高度教養教育・学生支援機構教育評価分析センター長) 阿部 智 (東北工業大学 地域連携センター事務長) 鈴木道子 (尚絅学院大学 学長) 高野昌明 (株式会社ミヤギテレビサービス 非常勤相談役) 伊東昭代 (宮城県美術館 館長) 峯岸宏典 (株式会社一条工務店宮城 代表取締役社長)
委任状提出	なし
陪席者 (事務局 含)	大西晴樹 (学長)、千葉智則 (副学長 (総務担当))、村野井仁 (副学長 (学務担当))、中沢正利 (副学長 (点検・評価担当))、倉田洋 (学長室長)、中村教博 (高等教育開発室長)、齋藤涉 (高等教育開発室副室長) 阿部文智、武蔵幸子、佐藤壮 (以上、事務局 (学長室政策支援 I R 課))
欠席者	熊谷聡也 (石巻市立桜坂高等学校 校長)
成立確認	委員総数 7 名、出席 6 名、成立定数はなし
配付資料	【配付資料】 ● 2023 年度東北学院大学外部評価報告書
議長	杉本委員長 (東北大学 高度教養教育・学生支援機構教育評価分析センター長)
司会	中沢副学長 (点検・評価担当)
書記	学長室政策支援 I R 課 (事務局)

2. 議事の経過及びその結果

挨拶	
	<ul style="list-style-type: none"> ● 大西学長： 本日は年度末のお忙しいところ、お集まりいただき感謝申し上げます。おかげさまでようやく年度末まで来たところであり、明日は卒業式である。一つの区切りになる。 今、大学は少子化の中で対応が問われている。高等教育が進展しなければこの国の発展はあり得ず、そういった意味で非常に厳しいところに差し掛かっていると思っている。 来年度は、本学は認証評価を受審する年であり、そのための準備を重ねている。一方では、e ポートフォリオを 1 年生から使って、学修成果の可視化、学修者本位の教育、主体性のある学修者を育てていこうと進めているところである。様々な観点からご意見をいただき、評価に耐えうるような大学を目指していきたいと思っている。よろしくお願ひ申し上げます。

- 杉本委員長：2023年度の外部評価を本日報告書としてまとめることができた。皆様にご協力いただき感謝申し上げます。お手元にお示ししたとおりだが、簡単に今年度の外部評価の概要に関して説明をさせていただく。委員の先生方からいただいた所見等をまとめて総評という形でも出させていただいた。そのことも含めてご説明する。

2023年度の外部評価は、第5期の外部評価が昨年度からの3年間で、今年度は2年目に当たる。この3年間は教学マネジメントの運用状況を評価対象とし外部評価を進めている。昨年度は前回の認証評価で一定の評価をされていた、事務職員の育成や資質向上への取り組み、教職員の能力開発等に関して書面と質疑を通して評価をさせていただいた。

今年度は、学修成果の検証及び可視化という点で、先ほど学長からも話があったが、eポートフォリオの活用や、学修成果の検証等に基づいて、学修支援、研究指導の取り組みがどのようになされているのか外部評価をさせていただいた。

初年度調査も含めて大学の教職員の皆様にはご協力をいただき感謝申し上げます。そして今年度は学生インタビューということで、学生の皆様から学修成果に関連する、実態、実像を明らかにするためのインタビューをさせていただいた。このご協力に関しても感謝申し上げたいと思う。

今年度の外部評価を通して、貴学において大学マネジメント体制のもとでの学修成果の検証・可視化、あるいは学生の参画について、どのような状況であるか、委員全員から特に学修成果の検証や可視化に関する取り組みは、制度的な整備、構築は多面的に多様な形でなされていると評価されている。もちろん、eポートフォリオも1年生から始めたというところでまだまだ緒に就いたばかりであり、これから状況を見定めていく必要があるが、全体としては準備に必要な制度、あるいは装置等、大学の中に整備されているといえると評価をさせていただいた。ただし個別に見ると、例えば評価報告書22ページの最後の総評に書かせていただいたが、1. (1) 学修成果の検証及び可視化のところに、まだこれから取り組みが必要なこととして①～⑤まで挙げさせていただいている。①授業改善のためのアンケートの回答率については、回答率が低いところ、アンケート結果への対応に少し課題が残る。②アセスメント・プランについて、これも制度としては整備されているが、その実質化ということも課題がある。ただし一部のことで全てではないが、特に③学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）の達成度を検証するための評価指標が必ずしも十分に明示されていない部局があることも課題であると思う。評価指標等の取り組みは平仄を揃え、各部局の状況や文脈に合わせて進めていく必要があると思う。④特待生、優等生等の表彰制度について、こうしたものの成果検証や改善について、経済界の外部評価委員の先生方の観点から指摘をされているが、外から見た場合に貴学の特待生や優等生の表彰制度はわかりやすいが、制度の成果の検証をもっと進めていく必要があるという意見があった。最後に⑤GPAの重視、積極的な活用に課題がある。特にグローバル化ということになると、留学等にGPAが使われることもある。そうした側面もあり、GPAの積極的な活用を図っていくことが必要であると指摘されている。また2. (2) eポートフォリオの活用についても、導入整備が進んでいることは委員が共通して評価している。ただ、eポートフォリオへの入力率が低く、認知もまだ十分ではないところがあるのではないかと思う。これは始まったところなので、仕方がないところもあるが、今後、活用事例の周知や、活用強化月間等を設定

するなど、具体的な取り組みを進めることで、学生の認知・啓蒙を広げていくということも必要だろうということが委員の先生方から指摘されている。eポートフォリオの実質化が今後の課題である。次に学修支援・研究指導について、これは制度としてはグループ担任制度や、ラーニング・コモンズの中にアカデミックサポートデスクというものも設置されている。学生が支援を必要とする場面は多様にあると思うので、グループの担任ということもあるし、そうではなくてまた別のラーニング・コモンズ等に訪問して支援が受けられるように整備されているところは評価されている。今後はグループ担任制度の検証と評価、これは教員が中心となるが教員によってややバラツキがあると思うので、制度自体の教員側の認知、重要性の再確認をすることにより、制度の強化、定着を図っていくことが必要である。それを担うのは人間なので、教員をはじめ、職員等の聞く力、学生を見る力ということも育成していく、研修をしていくことも必要ではないかと指摘されている。そうした解決課題、改善課題があると思っているので、是非、今後取り組みを進めていただきたい。今回の3点について学生インタビューを通して、学生から裏付けを得るといえるか、制度について実際に学生がどのように受け止めているのかを直接聞くことができた。評価として重要な機会であった。また、これは前回の学生インタビューの後にもお願い申し上げたことだが、印象に残ったのは、大学院生の数が少ないので大学院生の支援が十分ではない、学部生に寄ってしまうということであった。大学院生は、例えば理系の大学院生は、夜中に実験で大学に残ることもなかなかしにくいところがあると、実際に声があった。これも大学としてはセキュリティーの問題もあり難しいが、大学院生の支援という観点からは何かしら解決といえるか、学生の理解を得ていく取り組みが必要ではないかと思っている。そうした声を直接、評価委員として聞くことができたことはとても良かった。是非今後の改善に活かしていただければと思う。先ほど、第一部で外部評価委員の先生方からご意見をいただいた。大変重要なご指摘で、本質的な議論をしていただき、私自身も考えるところが沢山あった。これは貴学だけの問題ではないというところが、先生方からの意見として感じたが、つまり日本の大学教育の課題として共通の部分がある。大変広い視野からそうした課題を議論させていただいた。

残りの時間は、質疑も含めて、所感を外部評価委員の先生方からいただくことで進めさせていただきたい。

- 阿部副委員長：様々な観点から、認証評価を踏まえながら制度を入れられており、先進的に取り組む意識を大学全体で持たれているというところが随所に感じられた。ただ、やはり様々な要望がある中で、色々な数値をより精緻に分析し、管理して学生の学びに結び付けていく、その取り組みについて、実際に活用状況がどうなのかと考えると、どの大学でもそうだが、年度計画作成時等にしか成果について振り返って考える機会がない。都度、どのように活かしているか多方面からの検証をする意識を持って、検証する機会を設ける必要があると思う。制度を作り、導入して、費用をかけて、費用が活かされていないというところの難しさをすごく感じている。いかに活かされているかの検証が必要である。
- 鈴木委員：外部評価委員会に参加させていただき、いつも勉強させていただいていると思っている。さすが東北学院大学はしっかりやっておられると思っている。今回も委員の疑問に対して細かく各部署からお答えをいただいたり、また学生インタビューをした中で、しっかりやっておられることが良く分かった。

一方、これは東北学院大学だけではないが、やるべきことはしっかりやっている、シ

システムも出来ている、ただその実質化のところはまだ出来ていない。つくづく思うのは、文科省からの指導もあり、認証評価もかなりしっかり項目が指定されているので、やるべきことはしっかり作っていくけれども、やはりある意味上から降ってきたような形になっている。教職員から必要だと出てきたものではなく、やらなければならないこととしてやっているの、やはりその実質化というところは難しいと思っている。教職員の意識改革が一番手間もかかり、時間もかかる場所である。ただ、これを続けることで、成果が出てくると思う。学修成果が見える化することにより、学生たちが「自分がこんなに伸びたのだ」と実感するようになれば、逆にそのことにより教職員のモチベーションが上がるのではないかと。そういうものを見せながら、やりながら、教員がやはりこれは大事だとわかって、それをまた学生たちに戻していくことで、良い循環が生まれてくるのではないかと。やはり一番大切なのはシステムを作るのではなく、その実質化と意識改革なのだろうと思った。すごく頑張って、よくやっておられると思う。

- 高野委員：大学を良くしようという努力は今回とてもわかった。それを学生に上手く運用してもらえるかということを考えるのが一番かと思う。うちの会社では、何かがあると実行委員会というものを作って若手だけ集めて検証するというやり方をよくしている。若手でまとめたものを上にあげていくという形になっている。大学の先生方も忙しいとは思いますが、先生方と学生のちょっとした委員会のようなものを作り、どうしたら運用がうまくいくか検証するような組織が作れば、良い方向に向かうのではないかと。しっかりした制度を作るのはいいが、それをいかにうまく運用していくかというのが課題なのではないかと私も感じた。そこは多分どこの企業も、大学も同じだと思う。一方的なことではなくお互いにやることで意味がある。今回学生インタビューをして、私もとても勉強になり、思った以上に学生はちゃんと考えていることがわかった。先生方と学生が上手い具合に融合して、良い方向に向かうような方法を考えてはどうかと思った。
- 伊東委員：私は幼稚園・小・中・高の教育に携わってきたが、大学に関しては自分の学生時代や、子どもが大学にいた時などしか関係がなかったので、大学の状況について非常に新鮮にいろんな話を伺えた。その中で、時代で新たなシステムや制度が求められ、それを積極的に取り入れているということは感じた。これをいかに実質化していくかということが本当に大事だということも感じた。その時にどうしたら効果が上がるかということ、やはり何のためにこれが入ってきているのかという根本のところの共感、共通認識というか、そのあたりがとても大事なのだろうと思っている。学生たちの力を上げるためには、学修成果の見える化が大事であるとか、まずそこで共通理解を持って、その上でこのやり方でとやってみる。文科省からの要請がどのくらいガチガチなのか判らないので何とも言えないが、やり方に工夫が出来るのか、あるいはここは力を抜いて、ここを重点的にやっつけていこうとか、そうして進めていくのが大事なのではないかと。腑に落ちながらシステムをどう動かしていくか、そして数が多いので一斉には難しくても、中心人物から、共感してやっていく人たちが増えていくのは大事だろうと感じた。それが、いずれ学生たちがシステムを使いながら、自分でも学んでいこうというところに繋がっていけば、素晴らしい大学になると思った。是非それを期待したいと思う。
- 峯岸委員：私も第一部で申し上げたのは、私が在学中の25年前には無かった素晴らしいシステムが出来ていると思った。私が在学中は出席することと卒業することが目的だったので、ここまで大学が色々やってくれていたということを改めて感じた。言葉が横文字でシステムの名称も結構多いので、このあたりの言語整理と定義整理をする必要があ

る。各項目の目的は何か、学生に一元的に1ページにまとめてホームページに載っていると、こんなに川上から川下までいろんなサポートしてくれているのだということが目に見えることが重要である。先ほど教職員の方々の協力が必要という話もあったが、学生から相談があった時に、教職員がきちんとシステムの機能と役割を理解して学生を誘導していくことがあると、より活性化するのではないかと思う。

また、やはり印象に残ったのは学生インタビューで、院生の方たちがどうしてもキャリア迷子になっている感じがあった。実はこういったシステムを必要としている。実は教授が側にいない、教授が忙しそうだななど、いろんな相談が気軽に出来ないという声があった。そのあたりをシステムで補完できるようなことができれば良いのではないか。大学院生は情報にも出会えていない感じがした。院生にこのシステムが活用されるような情報が提供されるとよいと思う。

- 杉本委員長：以上、外部評価委員からの所感をいただいた。次に大学側からお話をいただきたい。
- 大西学長：様々な問題点、やってはいけない事の警告、システムの構築は進んでいるが、それを生かすも殺すも、我々次第というところだと思う。私もこのようなシステムを立ち上げてやはり何が問題か、教育力が必要であろうと思っている。それをどういうところで捻出していくか。やはり教員の意識は研究が出来ればという意識ができていますので、これにどう対応するかというのは、大問題である。

実は来年度に向けて2つの施策を立てた。一つは休退学を減らしたいというところから始まったが、学事暦の中に振り返りの日を設けて、成績の悪い学生については指導を入れるように、学部学科に求めている。例えば、1年生はオリエンテーションをやるが、2年生も全員集めて、成績開示の日に成績が悪かった学生について、学科長から指導を行い、落ちこぼれを無くすために、意図的に仕掛けるような形で教育を行うように学部長会でも議論して決めた。学生の成績は学生の問題だという言い訳ができなくなるころへ持ち込んでいる。

2つ目は、できる学生に関しては、本学はいろんなものが揃っているが、学生の居場所が見つからないという部分があるのではないか。これまで伝統的に学部は学務部が、部活・課外は学生部がという縦割り分担があったが、それぞれの場所でピアサポートをやってみないかという形で、今呼びかけをしている。例えば図書館では本好きの学生が集まり、図書館の運営についても口を挟むような機会を与えてはどうかとか、あらゆる部署がそのようなピアサポート体制をとれるような働きかけをした。これまで本学は、伝統的にオリエンテーションリーダー達はそれを誇りとしていて、オリエンテーションTG会というものがある。ボランティアも東日本大震災以来進んでいるが、学内ボランティアという位置づけをして、そこにポジティブバッジをeポートフォリオにつけたらどうかということを進めている。私は第3の教育機関だと言っているが、学生部でも学務部でもないところで、そのような形で学生たちが自分たちの居場所を作っていく、お互いに勉強できるような仕掛けを作っていく。そもそも大学はそういうものだと思う。勉強したい学生が来て切磋琢磨していくと思う。そういう仕掛けを来年度に向けて用意した。そういう意味では東北学院大学はより少し変わってくるのではないかという見通しを立てている。

また、システムは作ったが、それを使わないで良いのかという点については、警戒心を持って対応に当たろうとしているところである。学生とともにこの大学の未来を語ろうということについても、アドバイザー制度というものがあるが、これも実際には利

用されていないところがある。これからピアサポートなどを通じて担当部長やセンター長などが学生と接していこうと思う。これも縦割りの事務組織が教育に当たるということであったが、センター化して、例えば現在ラーニング・コモンズにはアドバイザーがいて学生の面倒を見ている。また今度は国際交流部をグローバル教育センターという形に変え、地域連携は地域連携センターとして、情報もセンター化を考えている。そこにある程度教員を張り付けるような形を考えている。これはあくまでも第3の道であり、専科ではないので、その評価については、1コマ分はそこでの活動を認めるという形で問題提起をした。センターが活性化し、自発的に勉強ができる環境を整えていけることができればという思いである。来年も外部評価していただければ、どれだけそういった仕組みが生きているのか、死んでいるのか理解していただけるのではないかと思います。今キャンパスが与えられ、新学部が与えられ、大学の中で自主性と、システムを活かしていくという観点から、データ化、可視化、これからはそういったものの向上を目指したい。

- 中沢副学長(点検・評価担当)：私は点検・評価担当なのでシステム作りやシステムの整備に関わっている。今回の総評を読ませていただき、非常にためになることが多かった。今までの歴史の中でちゃんと動いていたと思うところが、やはり外から見ていただいた時には足りない点、説明不足な点を指摘していただいたので、もう一段階考えてみたいと思っている。正解は無いのかもしれないが、もう少し外にも説明できるシステムを考えていきたいと思う。

他に、実質化という言葉が沢山出てきた。これは第4期の認証評価でも盛んに言われていることで、きちんと動いているのかということだが、これも実はなかなか先の見えない問題で、ある程度規模が大きくなってくると、動いているところも動いていないところもある。それも実際に学生本位の教育を考えると、きちんと検証しながら進めていく必要があると考えている。その他もためになることをご指摘いただいたので今後にかかしていきたい。

- 村野井副学長(学務担当)：客観的な視点からの評価をいただき感謝申し上げます。指摘いただいた中で、大学院生が取り残されているのではないかとのご指摘がいくつかあった。大学院は研究科により、定員が充足されているところもあるが、充足されていないところが多く、検討しているところである。少人数であるので、手厚いケアをしていると思っていたが、大学院生の側からは、教授が忙しすぎるとの指摘があり、指導が受けられないことであり、これは本当であってはならないことだと思っている。大学院の組織自体に関しても、定員が充足していないということについて大きな問題として捉えており、事務組織の観点からも大きく見直して検討しているところである。ご意見をいただき、背中を押していただいた。

- 千葉副学長(総務担当)：総評(3)学修支援・研究指導に関する中で、グループ担任制度に触れていただいたので、その点について説明させていただきながら、ご意見について感謝申し上げたいと思う。

グループ担任制度は、本学ではグループ主任制度と言っているが、私は昨年まで学生部長をしていたのでグループ主任制度に関わっていた。2年前までは教養学部の教員が1、2年生を担当する形になっていた。学生が所属する学部学科の教員が1年生からグループ主任として担当するのは2年前からスタートしたばかりである。そのため、これまで以上に学科の教員が初年度教育、1年生から面倒を見る形が非常に強化されてきている。おそらく今後、グループ主任制度を上手く利用することで、より初年次教育と、

より実質的な教育が出来るのではないかと期待している。

- 杉本委員長：外部評価委員から大学に何か質問があれば発言をお願いしたい。
- 峯岸委員：グループ主任制度は私が在学中もあった。その当時との違いを説明していただきたい。
- 千葉副学長(総務担当)：当時もだが、2年前まで教養学部の教員が担当していた。教養学部と工学部はそれぞれ教養学部と工学部の教員が1年生から担当していたが、土樋の学部に関してはキャンパスが離れており、1、2年生は泉キャンパスで教養教育を受けていたので、1、2年生に関しては教養学部の教員がグループ主任を担当する。そういう仕組みが2年前に変わり、各学部学科で1年生から専任教員が担当する形となった。
- 峯岸委員：学生からすると入学した学部学科の先生方がグループ主任となって、より距離的に縮まったということか。
- 千葉副学長(総務担当)：そうである。
- 大西学長：1年生から学部の教員が連続で4年間持ち上がりで面倒を見る形に変わった。ご経験されたと思うが、コロナ禍前は泊まり込みでオリエンテーションキャンプがあった。それが今は無くなったので、代わりにウェルカムデーというものを作り、オリエンテーション+学部で、それぞれの学部で歓迎会という形で新入生を迎える体制とした。学部が面倒を見るように変わってきた。ただ不慣れなものできちんとできているかどうかはまだわからない。
- 峯岸委員：教員一人に対して担当する学生が多いのではないか。
- 大西学長：大きな学部は、講演会だけにしようとしているところもある。
- 峯岸委員：グループ主任制度は当時からあったが、あまり機能していなかった。私は相談しに行ったことが無かった。学生側の視点では相談したいと思う動機がわからない。どこに教員がいるのか、どうやって連絡するのか判らない。どこまで話して良いのか、これを言ったら怒られるのではないかというのがある。あとは教員側の視点で言うと、前々回の委員会の回答にあったが、教員側の優先順位はやはり研究であった。そのあたりが生徒の成果が自分の成果になる、あるいは生徒の心理に答えることが自分の成果となるとインセンティブが働かないと難しいのではないか。
- 大西学長：教員に気持ちがなく、私は研究者だと言っていると、学生との接点がない。学生側にイントロダクションしないといけない。
- 鈴木委員：先ほどの大西学長の話を手を自らに言い聞かせるが、非常に学生が多様化しており、かなり密に一生懸命修学支援をしなければいけない学生がいる一方で、力がある学生をどう生かしていくのかというのがこれからの大学なんだろうと思う。東北大学には競争的な学生が入ってくると思うが、多くの私立はやはり競争的な経験のない学生たちが入ってくる。それだけ伸び代があるということで、それぞれの学生がどこまでこの4年間で伸びたかを見せながら、伸びた学生たちの力をどう使っていくのかというところが、これからの私立大学の生き残りのポイントではないかと思う。そういう意味で学修成果の可視化というのは、文科省から降ってきたような事ではあるが、上手く利用して、こんなふうに伸びたんだと、伸びた学生たちの力をこんなふうに大学は使っているんだと、ピアサポート、ピアチューターといろんな形で使っていくのが、これからすごく大事なんだろうと自ら言い聞かせているところである。
- 大西学長：教育というのは様々な刺激があると思う。教師だけが刺激を与えられるわけではなく、先輩がそうであったり、職員がそうであったり、いろんな出会いがあると思う。これだけの設備があり、これだけの学科があるのだから、そこをどう生かすかとい

うのが大事な問題である。そこで初めて小さな社会ができる。その人間関係を大切に生きて行って東北学院大学という学校を味わってもらいたい。果たして、ピアサポートが上手くいくか判らないが、これまでオリエンテーションリーダー達は絶大な成果が出ている。これで図書館であれ、情報処理センターであれ、学生たちが自主的に学べる機会を作っていけばしめたものだと思っている。

- 鈴木委員：教職員は仕事が増えてきて、かなり疲弊している。教職員だけで何かやろうというのは、難しい時代なのかなとつくづく思った。
- 杉本委員長：先ほども申し上げたが、第一部で評価委員の間に話をさせていただいたように、貴学の課題は我が大学の課題と共通しているという認識で、必ずしも上から「出来ていないのではないか、改善していく必要があるのではないか」ということを申し上げたくて外部評価をしているというのではない。ピアサポートではないがピアということで、外から外部の経済界、企業でご活躍の先生方の視点を入れていただくと、さらに充実した改善、大学の中に閉じない改善という形になるかと思う。そうした意見が第一部でも出たというところである。今日お話しさせていただいたこと、先生方からお話しいただいたことは、そうしたことも踏まえて、かなり広い視野から外部評価をさせていただいた。内外からの意見を踏まえた改善に繋げていただけるとよろしいかと思う。

来年は認証評価の受審ということで、これも文科省にすべての責任を負わすのも問題があると思うが、ある意味外形的な部分のチェックというか、どうしても認証評価では強くなるので、そうした意味で数合わせであったり、組織が機能していることをそれなりに見せる傾向が強くなってしまふ。これは認証評価自体が変わっていく必要があるが、それは乗り越えていただきたい。私が個人的に期待しているのは実質的に地味だと思うが、新しい制度を入れるととても華々しく何か変わるような感じがするが、先ほど大西学長が言われたように、学事暦の中に振り返りの機会を入れていただくとか、ピアサポートなども、とても重要な機会だと思っている。新しい制度が始まった時は盛り上がるが、どうしても継続していかないとか、粘り強さがどうしてもないというところが、自らを振り返ってもそう感じる。このあたり忌憚のない意見を言いながらピアとして学び合いながら改善していくことが、日本の大学教育にとって良いだろうと思っている。そうした機会にこの外部評価が貢献出来たらと思っている。また来年度もあるが、是非議論を進めさせていただき、貴学のさらなる発展に繋げていけたらと思っている。よろしくお願い申し上げます。

本日は第3回の大学評価委員会ということで、外部評価報告書を提出させていただいた。今年度はここで一旦閉じさせていただく。また来年度よろしくお願い申し上げます。

事務連絡	
●	事務局（武蔵）：本日の議事録を加えた形で、外部評価報告書は大学のホームページに公開させていただく。よろしくお願い申し上げます。 来年度は第5期の3年目になる。先ほど杉本委員長からも話があったが、認証評価の受審の年となるため、今年度とはスケジュールを少し変えさせていただくかもしれない。またご相談させていただきたい。

3. 次回予定

開催日時	未定
開催場所	未定

報告(予定)	未定
議案(予定)	未定

以上

2023 年度 東北学院大学外部評価報告書

発行日：2024 年 3 月 25 日発行

編集・発行：東北学院大学外部評価委員会

問合せ先：東北学院大学外部評価委員会事務局

学長室政策支援 IR 課

〒980-8511 宮城県仙台市青葉区土樋一丁目 3-1

TEL 022-264-6424 FAX 022-264-6364

E-Mail tgir@mail.tohoku-gakuin.ac.jp